HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	転換期にたつ姉妹都市交流 ： 交流成果を明日に架ける橋に
著者	井上，真蔵
引用	北海学園大学学園論集，141：1-39
発行日	2009-09-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

転換期にたつ姉妹都市交流

―― 交流成果を明日に架ける橋に[1] ――

井　上　真　蔵

はじめに

カナダと日本の自治体による姉妹都市提携の始まりは，1963 年のことである。日本側の都市は大阪の守口市，カナダ側の都市はブリティシュ・コロンビア州のニュー・ウエストミンスター市である。以来，現在にいたるまで，74 件の姉妹提携が誕生している[2]。この 74 件のうちの 26 件が北海道内の自治体によるものであり，北海道との結びつきの強さを表しているものと言える[3]。このような緊密な関係には北国の気候風土がカナダと似ているという要因が大きいのは言うまでもないが，北海道庁と毎年姉妹都市会議を主催している北海道カナダ協会の存在と尽力によるところが大きいと言える[4]。このように，地域としてのまとまりを持ち，姉妹都市活動に関する情報の交換と共有および協力関係を促進している地域は，北海道以外には見当たらないと言えるだろう。

しかし，このような北海道とカナダとの強い結びつきは，北海道内の姉妹都市に関係される方々にとっては当たり前の事であろうが，道外の方々にとってはまだまだそのような認識には至っていないと言っても良い[5]。それと同時に，北海道内の関係者にとって，北海道外のカナダとの姉妹

---

[1] 本稿は第 16 回北海道・カナダ姉妹都市会議での基調講演「転機にたつ姉妹都市交流 ―― 今，カナダから何を学ぶか ――」をもとに，加筆されたものである。第 16 回北海道・カナダ姉妹都市会議，かでる 2・7 にて 2007 年 12 月 3 日開催。

[2] カナダ大使館の「カナダ・日本　姉妹・友好都市リスト」，カナダ大使館ホームページ，http://www.international.gc.ca/missions/japan-japon/bilateral-relations-bilaterales/sistercity-jumelage-jpn.asp（2009 年 7 月 1 日現在）によれば 76 件である。ところが，「姉妹提携情報」自治体国際化協会のホームページ，http://www.clair.or.jp/cgi-bin/simai/j/02.cgi（2009 年 7 月 1 日現在）では 70 件であり，6 件の違いがある。カナダ大使館のリストにある上士幌町とスレイブレイク（アルバータ）については後の注でも触れるように姉妹都市提携をしておらず，大子町とギボンズの間にはかなり前から姉妹都市関係は存在していない。自治体国際化協会の 70 件のリストには，4 件が未登録のままだと推定される。このように未登録のままとか，姉妹都市提携を解消していても抹消されない場合もあり，現在（2009 年 7 月 1 日）の提携数は 74 件であると考えられる。

[3]「カナダ・日本　姉妹・友好都市リスト」（前掲）では 27 件になっている。この中には，上士幌町 ―― スレイブレイク（AB）が含まれているが，上士幌町役場の担当者の話によれば，以前はスレイブレイクとの交流があったものの，姉妹都市関係は存在していないとのことである。北海道カナダ協会のホームページでは 26 件となっており，上士幌町は記載されていない。http://www.lilac.co.jp/maple/sister.htm（2009 年 7 月 1 日現在）。

[4] 第 16 回北海道・カナダ姉妹都市会議にも，北海道庁より今田伸文氏（知事政策部知事室国際課主幹）と吉田圭吾氏（知事政策部知事室国際課主事）の両氏が出席されていた。

都市状況については，あまり把握されていないのが現状ではないだろうか。

それでは北海道外の状況はどのようなものなのか。どのような特徴があるのだろうか。北海道内とは対照的に，実に様々な形の姉妹都市交流が存在している。まず，北海道外の姉妹都市提携数は，全体の2/3弱の46件である。東京都とその隣接県内に13件，大阪とその周辺に6件と，かなりまとまっているようにも見えるが，北海道のように地域としてまとまった所は見当たらない。北海道外の場合には，都市の規模も大小様々であるし，一つの自治体で5つも6つも姉妹都市提携をしているところもあり，実に多様な種類の姉妹都市が存在していると言える。また北海道では，青少年の相互派遣は一般的であるが，道外の場合にはそのような交流が行なわれていないところもある。さらに，派遣をする場合でも，複数の都市と提携している所では，「既にこの都市には行ったから，来年は他の都市に」というように，派遣先を固定していない所も見られる。また，派遣主体が役場か教育委員会かの違いによっても，青少年派遣の準備や内容が異なり，準備を入念にする所があれば，「プログラムは一切なしでカナダ側に任せる」という所も存在している[6]。

このように全国的に見れば，かなりバラエティーに富んでいると言うことができる。このような事は，北海道に住んでいると北海道の状況が当たり前になってしまい，なかなか想像するのが困難な点であろう。例えば，数年前に広島市に姉妹都市の調査に行った時，広島カナダ協会にもお邪魔したことがあるが，以上のような思いを強くしたものである。と言うのも，広島にはカナダ名誉領事館があり，筆者が訪れた広島カナダ協会と同じ「中国電力株式会社」のビルの中に存在しており，ついつい北海道の場合と同じような状況が頭に浮かんだのである。「北海道にもカナダ名誉領事館があり，北海道カナダ協会は道銀ビルの中にあるし」と，全く勝手に類推してしまった次第である。しかし，まずは最初に驚かされたのは，中国電力のビルに一歩足を踏み入れると，そのセキュリティーの厳重さであった。受付の場所からは，単独移動は出来ず，上の階の広島カナダ協会への行き来には案内の人が始終付き添うと言った状況であった。また，広島市はモントリオールと姉妹提携をしているが，広島カナダ協会自体は特にモントリオールとの関係を促進強化している様子でもなく，同じ県内でオンタリオ州のハミルトンと姉妹提携している福山市とも

---

[5] この件と関連していつも思い出される事は，もう20年以上も前のことになるが，トロント大学の大学院に通っていた時のことである。ICU（International Christian University，国際基督教大学）時代からの知り合いが同じトロント大学の既婚者用アパートに住んでいたのだが，彼はベトナムからの留学生でエドモントンでの就職の面談から帰ってきた時のことだ。驚いた顔をして話してくれたのは，「アルバータでは，日本と言えば，東京ではなくて北海道だって！」と言うことであった。当時は何事も東京を通してのやり取りが一般的であったし，カナダに行く前はその東京に住んでいたので，余計に印象に残ったのであろう。その時以来，カナダとの姉妹都市関係が頭の片隅を占めるようになり，後に縁ありて北海道に住むようになってからは，いかにカナダとの結びつきが強いのかを実感するようになった次第である。

[6] 例えば，牛久市の青少年派遣プログラムがこれに相当する。詳しくは次の論文を参照のこと。井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ── 牛久市とホワイトホース市のケースについて ──」，『人文論集』（第31号），北海学園大学，2005年（以後，「牛久市とホワイトホース市」と略す）。

特に連係を取っているような所も見当たらなかった[7]。こうして，北海道におけるカナダとの様々な関係が「地域的にまとまっており」，他の地域に比べてかなり強固なものであるということを再認識する機会となったのであった。

以上のように，カナダとの姉妹都市関係と言っても，北海道内と北海道外の場合は，その特徴や状況も異なっているのが分かる。そして，それぞれの自治体はそれぞれ工夫を重ねて交流をしてきてはいるが，第16回北海道･カナダ姉妹都市会議のテーマにも示されているように，今やこの姉妹都市交流を取り巻く環境が劇的に変わってきているのである。まずは，どのような変化が起きているのかを理解しておくことが必要である。そして，そのような変化が起きている状況の下で，過去40年余りにわたり続けてきた姉妹都市交流は，どのような成果や影響をもたらしたのだろうかということを考えていきたい。最後に，カナダおよびカナダの人々と接して得られた体験や成果を，未来に活かしていくにはどうすれば良いのかということについても考えるべき時である。言わば，変化する環境の中で，姉妹都市交流の成果と蓄積を把握し，現在の時点から明日に向かって何をなすべきかを探ろうという試みである。

Ⅰ．姉妹都市環境の劇的変化 ── 環境の変化と認識すべき側面

日本とカナダとの姉妹都市の第1号，守口市とニュー・ウエストミンスター市が姉妹都市関係を結んだのは40年余前のことである。以来，日本とカナダとの間に結ばれた姉妹提携の数は70件余になっている。そして，今やこれまでにないような劇的な変化が，これらの姉妹都市を取り巻く環境に起こっているのである。

まさに転機に立つ今日，まずはこれらの変化がどのようなものなのかを認識しておくことが必要である。これらの変化は，⑴日加両国における自治体の合併，⑵日本側の財政的縮小，⑶定住外国人の増加と対応，⑷民間でできることは民間に，と言う大潮流になっている。そして，これらの激変する環境の中での姉妹都市交流を考えるには，⑸姉妹都市交流の本質について「再認識」と「再確認」をする作業が必要不可欠となる。

１．日加両国における市町村の合併統合

いわゆる平成の大合併により日本の自治体の数は大幅に減少しているという現状がある。カナダとの姉妹都市関係にある74の自治体のうち，14件が合併に関係しているが，その大半が平成の大合併によるものである。カナダ側の自治体による合併もあるが，それらは全部で3件であり，数としては多くはない。それでは，このような合併により，姉妹都市関係はどのような影響を受けているのであろうか。

まず，北海道外の場合から見ていこう。市町村合併をした自治体は次に示した様に，日本側が

[7] 広島カナダ協会におけるインタビュー，2007年10月30日。

12件，カナダ側が2件となっている[8]。

日本側
稲敷市（東町）　―　サーモンアーム　2005
さいたま市（岩槻市）埼玉県　―　ナナイモ　2005
相模原市（津久井町）神奈川県　―　トレイル　2006
伊豆市（修善寺）静岡県　―　ネルソン　2004
伊豆市（中伊豆町）静岡県　―　ホープ　2004
岐阜市（柳津町）岐阜県　―　サンダーベイ　2006
雲仙市（小浜町）長崎県　―　バンフ　2005
東近江市（能登川町）滋賀県　―　テーバー　2006
登米市（東和町）宮城県　―　バーノン　2005
美作市（作東町）岡山県　―　サン・バランタン　2005
本巣市（根尾村）岐阜県　―　デボン　2003
つくば市（豊里町）―　サマーランド　提携解消

カナダ側
相模原市　―トロント（スカボロ）
加賀市　―　ハミルトン（ダンダス）

さて，このようにして概観してみると，日本側は12件というかなりの数になっており，単純に件数をみただけでも合併の影響を感じないわけにいかない。実際，たまたま合併前の自治体を訪ねたことがあるが，担当職員の方からは「合併後は従来のような交流が続けられなくなるかも知れません」と言う懸念の声も聞かれている[9]。一般的に言って，市町村合併は行財政の「スリム化・効率化」を目指すものであり，合併される側の小さな自治体にとっては「独自の姉妹都市交流」を継続・維持することが困難になるものと予想される。たとえ合併当初の数年間は従来の姉妹都市交流を維持できたとしても，整理統合・規模縮小の傾向の中でやがては整理される恐れも十分にあると言える。

そして，合併の影響が非常に象徴的な形で現れた場合には，つくば市のケースのように姉妹都市提携の解消ということも起こり得る。つくば市の場合も，基本的には合併前の姉妹都市が引き

[8] 括弧内の自治体名は，合併前の自治体名であり，元々の姉妹都市を提携した自治体を表している。カナダ側の場合も同様であり，例えばスカボロの場合はトロント市に吸収合併され，元来の相模原市とスカボロとの姉妹都市提携をトロント市が引き継ぐという形をとっている。
[9] 岩槻市役所におけるインタビュー，2003年12月15日。

継がれてはいる。1987 年 11 月 30 日に筑波郡谷田部町，大穂町，豊里町，新治郡桜村の 4 町村が合併して，新たなつくば市が生まれたのである。しかし，谷田部町はアメリカのケンブリッジ市と 1984 年に，豊里町はカナダのサマーランド市と 1985 年に，それぞれ姉妹提携を結んでいるという経緯が存在している。サマーランドとの姉妹都市提携も当初は引き継がれたようであるが，やがては解消されてしまい，最終的にはつくば市の姉妹都市はアメリカのケンブリッジ市，アーバイン市，ミルピタス市と全てアメリカの都市となってしまっている[10]。

また，カナダ側の自治体が合併した場合は上の 2 件で数は少ないが，この場合の影響はどの程度あるのだろうか。例えば，相模原市は元来トロントに隣接するスカボロと姉妹都市関係にあったが，相手先のスカボロがトロントに合併されたのである。相模原市の人口は約 70 万人，一方スカボロの人口は 60 万人ほどで，人口の点では釣り合いのとれた関係であった。ところが，トロントはカナダ最大の都市で人口も 250 万人程で，あまりにも規模が違いすぎるということになってしまった。相模原市の担当の方は，「合併後もスカボロを相手に交流していきます」と語っていたが，将来に不安定要素を残すものだと言えるだろう[11]。

日本側（北海道）
大滝村（伊達市）　―　レイクカウチン　2006 年 3 月 1 日
常呂町（北見市）　―　バーヘッド　2006 年 3 月 5 日

カナダ側
名寄　―　リンゼイ（カワーサレイクス）

---

[10] 1989 年には，アメリカのアーバイン市と姉妹都市提携をおこなっているが，これは 1987 年に合併前の桜村にアーバイン市から申し込まれていたものを，つくば市が引き継いだものである。また，1996 年より茎崎町はアメリカのミルピタスと姉妹提携していたが，2002 年の合併時より，つくば市に受け継がれることとなった。サマーランドはオカナガンにある人口 1 万のリゾート地である。今や人口も 20 万の学園都市つくば市にとっては，ケンブリッジやアーバインのような学術都市やシリコンバレーにあるハイテク技術産業が集まるミルピタスのような都市の方が，人口 1 万人のカナダのリゾート地よりも戦略的にもつくば市の将来像と合致しているという考えがあったとしても無理はない。「国際交流」『つくば市』のサイト，www.city.tsukuba.ibaraki.jp-000327.html。

ところで，姉妹都市提携を締結する場合は，カナダ大使館などの「姉妹都市提携」に掲載されるが，姉妹都市交流が途絶えてしまった場合や，提携が解消された場合にも提携相手として「登録された状態」で残ることもあるようだ。つくば市の場合にも，筆者が調査のためにつくば市に問い合わせをした結果，姉妹都市提携が解消されていたことが判明した。「他にも大使館のリストを参考にした人は，つくば市がサマーランドと姉妹提携をしていると思われるので，解消の届け出をだされたらいかがですか」と申し上げたところ，数日後にリストから消えていたという経緯があった。

[11] トロント市のホームページ，http://www.toronto.ca/invest-in-toronto/pop_dwell.htm。相模原でのインタビュー。

北海道内の場合は，大滝村と常呂町がそれぞれ伊達市と北見市に合併されている。名寄市の提携相手先のリンゼイは合併によりカーワサレイクスとなったが，大した影響はでていないようなので[12]，ここでは大滝村と常呂町の場合を見ていくことにしよう。

大滝村は，1989年にレイク・カウチンと姉妹提携を結び，以来独自の取り組みをしてきている。平成8年には，「世界に開かれたまち，先進的な地域国際化推進のまち」として自治大臣から表彰されている人口1,600人ほどの小さな村である。ところが，2006年には壮瞥町とともに伊達市に合併されしまった。

姉妹都市などについては伊達市に引き継がれることになっており，中学生の海外研修についても「当面の間は」現行のとおり引き継がれることになっている[13]。大滝村の場合は，村内の中学2年生全員を研修に送るというのが特徴であったが，その費用は860万円と記載されている。壮瞥町はフィンランドのケミヤルヴィ市と友好都市の関係を結んでおり，中学生全員を派遣し，ケミヤルヴィ市の中学生を受け入れている。これらの費用が1,100万円ほどかかっている。伊達市もアメリカのミズーラへ中学生の派遣を行っている[14]。

大滝村にしろ壮瞥町にしろ，派遣費用は国際交流基金の積み立てを行ない，それを財源にしているとのことである。しかし，大滝村の担当者の方が姉妹都市会議で漏らしていたが，従来通りレイクカウチンに派遣することがきるのは基金の財源がある間だけとのことであった。「当面の間」は継続されるとしても，やがては「今まで通り」という訳にはいかない。将来的には，やはり限られた財源でまかなっていかないとならない訳であり，「地域住民が納得できるプログラム」だけが存続していくことになると思われる。その意味で，洞爺湖サミットの時にカナダの首相ハーパー夫妻が伊達市（旧大滝村）を訪れたが，これは「進むべき一つの道」を示唆していると言ってよいだろう。伊達市（旧大滝村）は，北海道内の他の自治体のように，ただ手をこまねいていた訳ではない。「カナダ・日本子ども環境サミット」をレイクカウチンと共催という形で企画し，旧大滝村との姉妹都市交流に熱心だったレイクカウチンのジャックピーク町長がカナダ政府に熱心に働きかけた結果だということであった。伊達市（旧大滝村）の場合も明確な目的も示せず，カナダ側の姉妹都市を通じて具体的な働きかけもしなかったとしたら，恐らく他の自治体と同じような結果になり，ハーパー首相は訪れはしなかったことであろう。ところで，レイクカウチンのジャックピーク町長が選挙に破れてしまったので，これからの姉妹都市交流もどうなるのか分からないという状況であるようだ[15]。

---

[12] 第16回北海道・カナダ姉妹都市会議における，名寄市の石川孝雄氏（名寄・リンゼイ姉妹都市友好委員会委員長）の話より。

[13]「伊達市・壮瞥町・大滝村合併協議会」第10回協議会，www.city.date.hokkaido.jp-merger_item.html。

[14]「伊達市・壮瞥町・大滝村合併協議会，平成16年7月1日」，http://www.city.date.hokkaido.jp/gappei/nishiiburi/pdf/m010_g001.pdf。

[15] 洞爺湖サミット「カナダ首相　伊達市で歓迎」*Yomiuri Online*，2009年7月7日。hokkaido.yomiuri.co.jp-080707_7.htm，*Doshin Web*，2008年12月3日。『室蘭民放』Web News，2008年7月8日，www.muromin.

さて，常呂町はバーヘッドと姉妹都市関係にあるが，カーリングの「2大会連続オリンピック出場」で有名になったように，独自の活動を行なってきた町である。1991年に姉妹都市提携をして以来，人口4,900人の町は高校生を含めて一般町民など200名以上を派遣してきている。しかし，この人口5千人弱の町は，2006年3月5日に留辺蘂町と端野町と共に北見市に合併された。北見市は人口12万で，ロシアのポロナイスク市，アメリカのエリザベス市，韓国の晋州市の3都市と姉妹都市を提携しており，これに常呂町の姉妹都市のバーヘッドが加わることになる[16]。

こうして北見市の姉妹都市は4つになるが，日本国内の姉妹都市も加えると，北見市の姉妹都市は8件になる。一般的に言えば，合併前の交流プログラムは「当面の間」は従来通り継続されることになることが多いが，「今後の交流等関わりについて整理していかないと，それぞれの交流がかえって手薄になっていくのではないか」という声もでている。さらに北見市の元々の姉妹都市であるエリザベス市との40周年記念事業については，エリザベス市の財政的事情で開催されなかったり，北見市民自体が「エリザベス市のことを知っているとは思わないので，北見市民へ広くエリザベス市のPR，広報，写真展等の取り組みが望ましい」というような状況である[17]。

エリザベス市との場合とは対照的に，常呂町とバーヘッドの関係についてはカーリングを通して実質的な活動が行われてきている。常呂町とバーヘッドとの間では，高校生の相互派遣も行なわれており，1名については1年間の派遣も行なわれている。常呂高校の生徒5名（引率2名）をバーヘッドに派遣す事業は合併後も継続され，事業費の一部補助が認められている。しかし合併した自治体の一つである留辺蘂町も平成13年より生徒4名（教員2名）を英語学習実践のためにバンクーバー近郊に派遣している。北見市には他にも高校が7校あるので，「なぜ常呂高校の生徒だけが」，「なぜ留辺蘂高校の生徒だけが」という声もでてくるかも知れない。

以上見てきたように，合併の影響はこれから出てくるものと思われる。当面の間は従来のプログラムが継続されるが，やがては地域住民の間で評価されるプログラムが残っていくことになるのは間違いがないだろう。姉妹都市交流が実質的に実りのあるプログラムでなければ，合併後の数年間は存続は可能であろうが，それ以後も継続されるという保証は全くないと言ってもよい。

2．日本側の経費縮小

全国的な傾向として，行政の財政支出に対してますます厳しい状況となってきているが，姉妹都市交流に関しても例外ではない。北海道内の場合には，従来からの姉妹都市交流事業が概ね継続されているが，全国的に見ればむしろ既存の事業の縮小や廃止といった状況の方が多くなって

mnw.jp-20080708m_05.html。第18回北海道・カナダ姉妹都市会議（平成21年6月11日，札幌プリンスホテルにて開催）にて今井等氏（大滝国際フレンドシップ副会長）による発言。

[16]「『カーリング』── 小さな町の大きな挑戦常呂町」，www.nrc.or.jp-110-112.pdf。

[17]「平成20年度国際交流事業及び姉妹友好都市交流事業実施報告について」，www.city.kitami.lg.jp-20sirixyou2.pdf。「平成20年度姉妹都市交流事業（予定）について」，www.city.kitami.lg.jp-19sirixyou2.pdf。

きている。

例えば，オンタリオ州のバーリントンと姉妹提携をしている板橋区のケースを見てみよう。板橋区はかつてオンタリオ湖畔で25万ドルの花火を打ち上げたのを初めとし，語学研修，青少年派遣事業および市民訪問団派遣など，実に様々な活動を積極的に行なっていた。しかし，今では板橋区役所の補助で行なわれてきたこれらの事業は中止になっている。現在も継続されているのは，区民訪問団の派遣だけになっている。行政からの補助は一切なしに，費用は全て参加者の自己負担ということで，現在も継続されていると言った状況である。しかし特筆すべきは，一般の区民訪問団を毎年派遣しているという点である。毎年の派遣ということは，地域に経済的余裕のある人たちが居るということでもあるが，担当職員の方々の熱意と努力の現れでもあると言っても良いだろう。いずれにせよ，以上のように姉妹都市交流への財源の削減が現れてきているのである[18]。

また，横浜市の場合は，ユニークなプログラムをかなりの期間にわたり継続して行ってきたこともあった。それは，バンクーバーでカナダ人による日本語弁論コンテストを開き，その優勝者を招待していたプログラムであった。このような形でイニシャティブを取るというのは非常に珍しいことであり，一般的にはあまり見られないことである。ところが，「日本語を学んでもらって日本の事をよく知ってもらおう」という意図が必ずしも適切に理解されなかったということも理由の一つとして挙げられているが，残念ながら廃止されたという経緯がある[19]。

ほんとうに何とか経費をかけずに交流事業の継続ができないものかと，自治体の担当職員の方々は苦労しているようである。例えば，数年前に千葉市の姉妹都市担当の方から電話で相談を受けたことがある。千葉市の場合はノース・バンクーバーと姉妹提携をしており，中学生を派遣してきていたのだが，「なるべく費用をかけないで派遣するには，どうしたら良いのでしょうか」というのが相談の内容であった。千葉市からノース・バンクーバーまでだから，距離も短いし，ホームステイの費用は要らないし，経費の大半はまさに飛行機代が主な部分である。格安運賃の飛行機を探すか，シーズンオフの安い時に行く方法などが考えられる。しかし，個人で行く場合は，そのような事も可能であるが，毎年あるいは隔年ごとに中学生を派遣するとなると，制度的に継続していくことはかなり困難なことであろう。中学生の派遣をするのに，教育委員会のプログラムとして行っている所や小さな自治体の場合には，全額補助という形をとっている所もある。行政が全く補助をだしていない所も，例外的ではあるが見られないこともない[20]。

カナダから日本に来る場合，一般的に自己負担であるから，財源的には非常に厳しい状況であ

[18] 井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ── 板橋区とバーリントン市のケースについて ──」，『人文論集』(第37号)，北海学園大学，2007年（以後，「板橋区とバーリントン市」と略す)，20-25ページ。

[19] 横浜市国際交流協会でのインタビュー。

[20] 担当の方が知恵をしぼって何とか派遣させたいという気持ちはヒシヒシと伝わってきたが，ここで述べたような情報しか提供できず，残念ながら，それ以上の役にたつアドバイスを提供することはできなかった。

る。引率教員の飛行機代に関しては，ある一定数のグループを確保できれば一人分が無料となるチケットを利用していると言った工夫をしている場合もある。お金をかけずに事業を継続していくという点に関しては，カナダの経験から学ぶところが多いかも知れない[21]。

３．外国人定住者への対応 ── プライオリティの変化

姉妹都市交流における自治体の役割は，海外の自治体との間に友好関係を発展・維持していくということである。そして海外の姉妹都市から訪問団を迎える時も，それはゲストとして迎える訳である。ところが，近年，海外からやってきた人々が「自治体の住民」として住み着くようになってきている。姉妹都市交流の場合には，適宜，企画立案して実行していくが，担当部門や担当職員が一年間姉妹都市交流の件に縛られているという訳でもない。そして時にはプログラムを中止することも可能である。ところが，「外国人住民を地域に持つ」ということは，1 年 365 日間，一日 24 時間の休みなしの仕事となるのである。姉妹都市とは全く質の違った仕事であり，それも「目の前の差し迫った」仕事であり，住民にたいするサービスとして中止することは不可能な事柄なのである。まさに，外国人定住者にとっての問題を解決しいかに住み易くするかが，地域住民一般（日本人住民と外国人住民）にとって住み易い地域になるかどうかに関わってきているのである。

さて，北海道の場合は，外国人定住者の数は 2 万人ほどで，札幌でも 9,000 人程度である。北海道内のカナダと姉妹都市提携にある自治体では，比較的外国人住民の数が多い函館市の場合でも 600 人余りであるので，外国人住民への対応はまだ差し迫ったものではないのかも知れない。しかし，全国的に見れば，外国人登録者数は，215 万人となり総人口の 1.69 パーセントを占めている[22]。とりわけ都市部に多くなっているのが現状である。例えば人口に占める割合で見てみると，東京都内では江東区が 4.09%，板橋区が 3.82%，世田谷区 1.92%である。実数は，それぞれ 18,664 人，18,153 人，16,064 人となっている[23]。横浜市の場合は，外国人の割合は 2.17%であるが，実数は 79,820 人である[24]。このように地域内に外国人住民を多く抱えるようになった自治体にとっては，それらの住民が毎日の生活を問題なく過ごせるようにすることが，まさに目の前の課題となっているのである。これらの区役所や市役所に足を運んでみると，日本語以外にも英語，中国語，韓国語などで表示が目につき，どのような外国人が住民となっているのかが一目瞭然で

[21] 江東区立第三大島小学校でのインタビュー。

[22] 法務省入国管理局「平成 19 年末現在における外国人登録者統計について」平成 20 年 6 月，www.moj.go.jp-080601-1.pdf。

[23]「江東区の世帯と人口(住民基本台帳による)区民部区民課」(平成 21 年 1 月 1 日現在)，http://www.city.koto.lg.jp/profile/koto/5353/15817/file/H21.1.pdf。「世帯数・人口数平成 21 年 7 月 1 日」，http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/020/020305.html。「せたがや統計情報館」(平成 21 年 7 月 1 日)，http://www.city.setagaya.tokyo.jp/toukei/index.html。

[24]「横浜市区別外国人登録人口（平成 21 年 6 月末現在)」横浜市統計ポータルサイト，http://www.city.yokohama.jp/me/stat/jinko/non-jp/new-j.html。

ある。

このような状況の中で，多くの自治体は，「外なる国際化（姉妹都市交流）」よりも「内なる国際化（外国人住民への対応）」に人材も財源もシフトせざるをえない傾向にある。ゴミの出し方から，プロパンガスの使い方，日々の生活の仕方，病気になった時の対処法，子どもの学校教育など，生活の全てに関わる問題である。日本人住民なら当たり前のことを，「言葉でもって」説明することが必要になってきているが，外国人住民はその言葉である日本語自体が不自由な場合も多いし，文化的な違いも大きな課題である。日本人にとっても「外国人定住者」にとっても，いかに住み易くするか —— これが自治体に与えられた課題なのである。

4．「民間でできることは，民間へ」の考え方 —— 既存プログラムの廃止

一般的な風潮として，「民間でできることは民間へ」という考え方が市民権を得てきている。市民の中にも，「姉妹都市は時代遅れだ。誰でも簡単に海外へ行ける時代に，自治体が派遣に関わることが必要なのか？」という声も聞かれる。先ほど触れた板橋区の場合にも，担当職員の口から，「民間でできる事は民間でという時代ですから」という言葉も聞かれた[25]。自治体としては一般的な財源縮小という状況の中で，姉妹都市交流への補助も従来のように気前良く出すわけにはいかなくなっている。従って，「民間にできることは，民間へ」というフレーズは「誠に適切であり，もっともだ」と思われがちである。

事実，このような考え方により，既存の交流事業が廃止されているという現状が起こっている。既に補助金削減との関係で触れたが，板橋区の場合には「バーリントン英語研修」，「青少年派遣」などが廃止されている。「バーリントン英語研修」は，板橋区の在住・在学・在勤の18歳以上の者であれば参加できるという非常にユニークなプログラムであり，「青少年派遣」は板橋区内の中学生と高校生を派遣する人気の高いプログラムであった。これら二つのプログラムは，職業的にも年齢の点でも多様な参加者を含んでいるという点で非常にユニークなものであった。板橋区の代表としてバーリントンでホームステイを体験してきて，地域の核ともなりうる人たちを育てるプログラムでもあったのである[26]。一般的に言えば，このように完全に廃止にならないまでも，今までのプログラムを継続していくのが精一杯で，新たなプログラムは難しいというのが，今日の現実であると言える。

さて，「民間でできることは民間へ」ということを，もう少し踏み込んで考えてみよう。確かに，上に触れたように，「誰でも簡単に海外に行ける時代」になったことは事実である。大学のみならず，中学校や高校までもが海外研修を行なっている時代である。また，旅行代理店や大学の生協も，語学研修プログラムを扱っている。大学生であれば，少し頑張ってアルバイトをすれば，何

[25] 2002年11月10日，板橋区役所において行われたインンタビュー。

[26] 板橋区の様々なプログラムについては，次の論文を参照のこと。井上真蔵「板橋区とバーリントン市」，前掲，2007年。

とか調達できそうな費用で語学留学が可能である。それでは，その内容はどのようなものなのだろうか？

(1)　ビジネスとしてのホームステイ

今や普通になった語学研修 ── それは極めて簡単に言えば，「ビジネスとしてのホームステイ」と言っても良い。この言葉が，その本質を現わしていると言って良いだろう。筆者のゼミの学生の中に，カナダへ夏の語学研修に行った学生がかなり居るのだが，それらの例を２，３取り上げてみよう。大学の生協や町の旅行会社を通して行った場合，ある学生はトロントで１ヶ月間独身のワーキングウーマンの所にホームステイしたが，夕食を一度も一緒に食べたことがなかったとのことである。また，別の学生はバンクーバーに語学研修でホームステイをしたのだが，一部屋に３人入れられたとのことである。さすがに，先に居たドイツ人学生は，さらに新たな学生が来て４人部屋なると聞いて逃げ出したとのことであった。そして，その家庭は「５年前にカナダ人になった」フィリピンからやってきた家族ということであった[27]。大体，学生一人ホームステイすると，１ヶ月で５万円ほどの収入になり，ビジネスとして考えれば，このようなホームステイがあっても不思議ではない。

それでは，中学校や高校，あるいは大学で行なう海外研修の場合は，どのような状況なのだろうか。最近の日本では，中学校も大学も夏の一時期に語学研修を行なうということは珍しくはない。カナダ側も，語学研修に参加する学生を世界中から集めようと「企業努力」をしている。その結果，何が起こるのかと言えば，夏の限られた期間に世界中からの学生が集中することになるのである。例えば，ナイアガラの滝の近くにブロック大学という大学があるが，夏の７月や８月には，500 人，600 人の学生が集まってくる。ブロック大学があるセントキャサリンズの町の人口は 12 万程であり，当然のことながらホームステイの数は十分ではない。その結果，一軒の家に，３人，４人の学生が泊まることになり，ホームステイ用に別棟を増築する所もでてきて当然である。また，たまたま出会ったのだが，横浜で中高一貫教育をしているある学校は，60 名もの生徒を研修に送ってきており，引率の教員が二人居たのだが，研修は全て業者に任せっきりであった。生徒一人当たりの費用は 60 万円とのことで，短い１ヶ月の間に 3,600 万円のお金が動く，まさにビジネスとしてのホームステイだと言うことができる。

５．姉妹都市交流の本質―「友好と親善」の再認識

以上見てきたように，現在の姉妹都市交流を取り巻く環境は，非常に厳しくなってきている。財源的にも補助金の額がだんだんと削減されてきているのが現状である。地域内に定住外国人が

[27] フィリピンから移住してきた人であれ，どこから移住してきた人であれ，三世ともなれば英語もカナダ文化も身につき，日本人学生がホームステイをしてカナダの英語や文化を学ぶことができる。学生自身がこのような違いを理解した上でホームステイをするのであれば，問題はない。

増えてきている自治体では，これらの定住外国人に対する対応措置は緊急性を帯びたものであり，従来姉妹都市交流に当てられていた財源と競合するようになっているのが現状である。さらに，「民間でできるものは民間で」という考え方も力を得てきている状況の下で，姉妹都市交流のプログラムの中には廃止されるものも少なくはない。まず，このような現状を，正面からキッチリと認識することが必要である。

それと同時に，今すべきことは姉妹都市交流の本質を正しく再認識することである。既に触れたように，「民間でできることは民間で」という考え方がある。そして，一見もっともらしい響きを持っている。しかし，このような考え方を姉妹都市交流に持ち込むことは，姉妹都市交流の本質とその役割が十分に理解されていないからだと言えるだろう。姉妹都市交流は，「親善・友好」が目的であり，「利益」の追求は目的とはしていない。ところが，民間のビジネスは，言うまでもなく「利益追求こそが目標」なのである。この「当たり前」ではあるが，「根本的な違い」を認識し，しっかりと把握しておかないと，姉妹都市の本質と意義は完全に忘れ去られてしまう恐れが十分にあると言えよう。

(1)　姉妹都市のホームステイ

姉妹都市交流の本質がどのようなものなのかは，そのホームステイの実態を見ればよく分かる。上にも触れたように，姉妹都市交流は「親善･友好」が目的であると言われているが，それは「一体，どのようなもの」なのだろうか。簡単に言えば，「家族の一員として」受入れて，ある一定の期間生活を共にするものであり，金銭の授受を伴うものではない。従って，基本的には経済的にも時間的にも「ゆとり」のある家庭がホストファミリーになるのが普通である。お互いに相手方の姉妹都市に興味を持ち，理解しあいたいという「精神的なゆとり」も必要である。もちろんカナダ側の姉妹都市にも様々な家庭が存在してはいるが，カナダ側の姉妹都市担当者は「余裕があってボランティアの精神で受け入れてくれる家庭」を提供してくれているのである[28]。

「家族の一員として」受け入れる訳であるから，先ほど触れたビジネスとしてのホームステイの場合のように，３人も４人もの外国人学生が「一つの部屋で寝起きを共にする」ことは，あり得ない。もちろん時にはホストファミリーの数が足りない場合とか，ホスト側の事情により１軒の家に二人とか三人が同時にホームステイする場合もある。しかし，そんな場合でも，一人ひとりに個室が与えられるのが普通であり，三人が相部屋になるような事態は起こりえない。そして，全く家族の一員として生活する訳であるから，ビジネスとしてのホームステイに見られるように，３人，４人の留学生だけで食卓を囲むというような光景もあり得ない。さらに，ホームステイの期間中に，カナダ人の生活の様々な側面を体験することになるが，何よりも重要なことは，生まれて初めて「相手と真剣に向き合うコミュニケーション」を体験するということなのである。実

[28] 井上真蔵「板橋区とバーリントン市」前掲，40-42ページ。

際にカナダ人の家庭に入ってどのような生活をするのかについては，後ほどその一部について触れてみたい。

⑵　自治体の代表として

さて,姉妹都市交流によるプログラムに見られる重要な特徴について述べておかねばならない。言うまでもなく，姉妹都市交流による派遣・訪問・研修プログラムは，自治体の代表としての活動だということである。全く当たり前のことだと思われるかも知れないが，この点が民間の業者によるプログラムとは決定的に異なるところなのである。

姉妹都市交流による訪問団の場合は，当然のことながら様々な公式行事にも参加することになり，自治体の代表としての扱いを受けることになる。つまり公式の場ではどのように振る舞うべきかという貴重な体験を得ることになるのである。記念式典や歓迎会などでは，その場に居ること自体で，カナダでは公式行事がどのように行なわれるのか，カナダ人はどのように臨むのかを知ることができる[29]。また，そのような場で日本側の代表としてスピーチをする機会に恵まれれば，これも貴重な体験になるのは言うまでもない。こうして，市民訪問団に参加した大人も中高生たちも，自治体の代表としての「振る舞い」がいかなるものかを「自らの目を通して」見たり体験することになるのである。また，教育や医療・福祉施設などを訪れることもよくあることであるが，普通ではなかなか見ることのできないカナダ社会の側面を見ることができる。「地域の代表という意識」が常にあるので，観察の仕方も違ってくるし，地元に帰ってからも役立てようという視点でカナダやカナダ人に接することになるのである。旅行会社の仲介などで行く場合には，自治体の代表として行く訳ではないので，以上のような条件は全くなくなり，「カナダ人とともに過ごす時間や空間」も全く異なったものになると言えるだろう。さらに，後に触れるように，カナダの一般の人びとの前でも，「自治体の代表」として合唱を披露したりする機会もあり得る。これらの事柄は，自治体による姉妹都市交流だからこそ，可能になるのである。まさに普通では出来ない貴重な体験をすることになると言えるだろう。

さらに，もう一つ重要な点を認識しておかねばならない。市民訪問団にしろ，中高生の研修にしろ，地域の代表としてカナダの姉妹都市において様々な体験をして帰ってくる。しかし，同じ地域に住んでいながらも，出発前には全く知らない者同士であるということも珍しくはない。カナダに行く前には見ず知らずの他人でありながらも，これらの人びとが「時間と空間とを共にし，カナダ的生活様式を学んでくる」意味は非常に大きなものである。つまり，これらの「職業，年代を越えて異なる経験を持った人びと」が，カナダで共通の体験をして帰ってきた時，地域の核

[29] 例えば，ある所の調印式では，23 名の訪問団の一人ひとりと握手をし，全員がサインを終わるまで見守っていた町長の態度にたいして，訪問団の一行は「礼儀と社交を重んずる」人物であると観察している。井上真蔵「国際化の一側面 ── 北海道とカナダとの姉妹都市関係について ──」,『北見大学論集』北海学園北見大学，1993 年（以後，「国際化の一側面」と略す），256 ページ。

となり，「地域の元気の素」となる可能性を秘めた人たちだと言うことである[30]。

II．姉妹都市交流の成果 ── カナダという異文化の影響

これまで姉妹都市交流に関わってきた人々は，実に様々な影響を受けてきている。とりわけ重要なのは，姉妹都市交流の核心である相互交流による影響である。つまり，姉妹都市交流は異文化接触ということであり，カナダおよびカナダ人という異文化に出会い，それまでには考えられなかったような影響を受けることになるのである。それは，現在のように劇的に変化した環境下においても同様であり，おそらくこれからの将来においても変わることはない。それでは，その影響とはどのようなものなのだろうか。

カナダ人と接する状況は，日本国内でカナダからの訪問団を受け入れる場合にも起こるが，ここでは日本からカナダを訪問してカナダ現地でカナダ人に接する場合について考えてみたい。この場合には，大きく分けて次の3つの場合が考えられる。まず，地域の一般市民による訪問団がカナダを訪れてカナダ人と接する場合，中高生などの若い人たちが派遣されてホームステイを通じてカナダ人と接する場合，そしてこれらの訪問団に随行している担当職員の方々がカナダ人と接する場合である。以下，この順に従って見ていくことにしよう。

1．市民の見たカナディアン・ウエイ（カナダ的生活と価値観）

市民訪問団の一員としてカナダを訪れた人々は，公式行事や歓迎会に出席したり，施設見学をしたり，ホームステイをすることにより，カナダ人の生活の仕方やその根っこにある価値観を知ることになる。いくつかの特徴的な側面を取り上げてみよう。

(1)　カナダ的もてなし方

姉妹都市を訪れると，まずは歓迎会やレセプションが開催されて，そこで初めて「カナダ的もてなし方」に接することになるのが一般的である。このカナダ的もてなし方は，様々な点で日本的もてなし方とは異なっており，最初はすごく驚くことになる。日本の基準では，歓迎会はホテルなどで行なわれることが多い。と言うよりも，「歓迎会は，ホテルで」というのが常識となっており，むしろ「ホテル以外で行なうこと」は，普通は頭に浮かばないのかも知れない。しかし，カナダの場合はホテルというよりは公共の施設で行なわれるのが一般的である。しかも料理は持ち寄り形式ということも珍しくはない。時には，市長宅や姉妹都市交流委員会の会長宅などでパー

[30] 特に東京都内の公立中学校の場合は，大体一つの「区の中」に20校から30校の学校がある。中学生の訪問団は，これらの学校の代表として選ばれることが多く，訪問団を結成した時には，見知らぬ他人同士である。それが，カナダでの研修を終えて帰ってくる時には，カナダという異文化体験を共有した仲間意識が生まれているのである。井上真蔵「江東区とサレー市」，『人文論集』(第26・27合併号)，北海学園大学，2004年（以後，「江東区とサレー市」と略す)，56-58ページ。

ティーが行なわれることもある。そして予定よりも参加者が多い時などは椅子まで持ち寄ることもあり，日本の訪問団にすればビックリすることだらけだと言ってもよい。ホテルでの歓迎会が一般的となっている日本基準から考えれば，最初は「ええ，これでいいの？」と思うかも知れないが，「手作り形式」，「持ち寄り形式」という中に，暖かい歓迎の気持ちをイッパイ感じるという人もいるようである[31]。そして，このような歓迎方式を，ある人は「経費は少なめに，真心はうんと多めに」という言葉で表現しているが，なるほど「まさに的を射た表現」である[32]。また，訪問団の中に町長さんが居て，たまたまこのような歓迎形式に出会ったりすると，帰って自分の町でもやってみようとするところも見られる。面倒は面倒に違いないが，財政的補助も削減状態の中では，見習うべき方式かも知れない。それに，「持ち寄り形式」を実施していく過程で，参加する地域の人たちの間で必然的に相談や連絡が行なわれる訳であるから，地域を元気にするということにもつながるのではないだろうか。

⑵　見栄より，実質 ── Value for Money

ホームステイの期間は決して長くはないが，ホストファミリーと一緒に出かけて食事をする機会もある。そこでもカナダ人の生活態度にびっくりする体験に出会うことが多い。食事が終わって，料理が残ってしまった場合，カナダではドッギーバッグに入れてもらって持ち帰ることは普通である。日本的感覚では，「もったいない」という気持ちはあっても，周りを気にするという見栄のせいか，なかなか持ち帰るということをする人は珍しいのではないだろうか。これだけでも普通は驚くべきことなのだが，さらに「いやー，ほんとうにビックリしました」と言って，ある人が体験したことを話してくれたのだが，それは「スープまで容器に入れてもらって持ち帰るんですよ」ということであった[33]。カナダ人の場合には，「もったいない」という気持ちと言うよりも，〝value for money″という気持ちからだと言えるかも知れない。つまり，「自分が支払った額に見合ったものを貰うのは当然である」という気持ちが強いように思われる。いずれにせよ，このような光景に出会うことにより，「もったいない」という気持ちを持ちながらも実行に移せない自分自身の日本的行動を考えるキッカケになるようである。そして，さらにはもっと大きな文脈で考える場合には，平気で食べ残しをし，平気で食品を破棄している日本社会のあり方をも考えるということもおこっているのである。

⑶　カナダ的夫婦のあり方

日本では，子どもができると，それまでの「夫と妻」の関係が「お父さんとお母さん」との関

[31] 考えてみれば，日本もずっと昔のことになるが，田舎での冠婚葬祭などの場合には全て手作りでもてなした訳であるから，案外もてなしの原点なのかも知れない。
[32] 井上真蔵「国際化の一側面」，前掲，258 ページ。
[33] 井上真蔵「江東区とサレー市」，前掲，69 ページ。

係になってしまうのが一般的だと言える。どうしても「子ども中心」の関係が重視されて，「夫と妻」という関係が後退してしまうのである。ところが，ホームステイの期間中に，カナダの夫婦関係のあり方を目の当たりにして，日本人の夫婦関係を考えてみる機会になることも多いようである。アルバータのある町にホームステイをした主婦の方の話であるが，ホストマザーは10人の子の母親で，仕事を持っているだけではなくて，町議員もしているとのことであった。これだけでも驚くべきことだが，家庭の中では「私たちでも目を見張るエンヂのきれいなガウン」を身につけており，「女である自分も大切にしている事がよく窺われる」と感心しながら語ってくれたのである[34]。また，別の女性の方は，カナダでは夫婦が週末に食事にでかけるという習慣があるのを聞いて，それまでは意識して考えたこともなかった日本の夫婦のあり方を考えるようになり，夫婦で食べに出かけるようになりましたと話してくれた[35]。

これらは，訪問団の女性の方々の目で見た観察であるが，男性の場合も似たような機会に巡り会う場合もある。ある家庭にホームステイをした男性は，そこのご主人から，「(今夜の歓迎会のために)ワイフがヘアーをセットしてきれいになったので，ママを褒めなさい」と言われたとのことであった。このような状況は全く夢にも思わなかったことなので，とにもかくにも，大慌てで「ベリーグッド，ビューティフル」を連発したとのことであった[36]。日本のお父さんとしては，まさかカナダ人の家庭でホームステイをして，そこの奥さんの髪型を褒めることになろうとは，全然想像もしなかったとしても当然のことであろう。これは，カナダ人の家庭における日常生活の一コマだが，このような事からもカナダの夫婦のあり方を知ることになるのである。そして，日本に帰ってからは自分の連れ合いの事を「ベリーグッド，ビューティフル」とは，とても恥ずかしくて言えることではないが，日本の男性として日本人の夫婦のあり方をも考える機会となっているのである。

(4)　自ら行動するカナダ人

もしカナダのある町の町長さんの所にホームステイをして，「朝ご飯の前に，ちょっと散歩しませんか？」と町長さんから誘われたとしたら，どうであろうか？　もちろん，「いいですよ。それじゃ，行きましょう」と返事をすることになることだろう。ところが，その散歩というのが，自家用機に乗って，朝の大空を散策しようということだとしたら，日本人としては一瞬言葉を失うに違いない。このエピソードは，アルバータ州にある小さな町での出来事だが，決して辺境の孤立した場所にある町で起こったという訳ではない[37]。日常生活の中に飛行機が出てくることなど，日本では全く考えられないことである。もちろんカナダ人の全てがそんな事をしている訳ではないが，冬のハンティングなどにはスキーをつけた飛行機で北に向かって飛んで行く人も，地域に

[34] 鹿追町『第3回鹿追町北方圏視察研修報告書』1986年，103ページ。
[35] 鹿追役場でのインタビュー。
[36] 鹿追町『第2回鹿追町北方圏視察研修報告書』1984年，64-65ページ。
[37] 井上真蔵「国際化の一側面」，前掲，256-257ページ。

よれば珍しいことではない[38]。いずれにせよ，この町長さんは役場に出勤するのもオートバイに乗って出勤するとのことで，根っからの行動派なのであろう。それにしても，日本的基準では「まさか，町長さんがオートバイで出勤とは！」となるはずであるから，カナダ人の行動力には驚ろかされることが多い[39]。

さて，同じように「いやはや，ほんとうに驚きました」という話を名寄市で聞かせていただいた。名寄市の姉妹都市はオンタリオ州のリンゼイであるが，名寄からの訪問団を迎えてのパーティーが湖の畔で開かれた時の出来事である。そこにオンタリオ州の観光大臣も出席したのだが，何と付き人もなく自分独りでボートを運転してパーティー会場にやってきたとのことであった[40]。実際，筆者がリンゼイを訪問した時に，この方とお会いしてボートで会場にやってきて日本の方は驚いたそうですと話したところ，「いやー，あの時はボートが故障してねー」とのことであった。いずれにせよ，日本では市長さんや議員さんになると，単独で行動することはあり得ない。まして，自らボートを運転してパーティーにやってくることなどは，起こりもしないし想像もできないことに違いない[41]。

(5)　人の目に囚われず，自分が決める

たとえ短い期間であっても，カナダ人の家庭にホームステイをして，カナダ人の中に混じって生活することは，日本人との行動の違いに目を向けさせることになっている。そして自分自身が変わるという経験をすることも起こっている。例えば，板橋区の担当職員の方は次のようなエピソードを話してくれた。

> 新しい経験した時の感じ方って，年齢関係ないですよね。みんな，スゴク，変わるんですよ。イッパイ人生経験を蓄積されてリタイアされた方でも…こんなカワイイ格好して良いのねって。次の日から，お洒落になったりするんですよ[42]。

---

[38] ケネル市役所（BC，1994 年 9 月 19 日）でのインタビュー。

[39] 井上真蔵「国際化の一側面」，前掲，256 ページ。

[40] 同上，256-257 ページ。

[41] リンゼイ市役所（1994 年 8 月 16 日）でのインタビュー。このように，カナダ人は公的地位にあっても，「自ら行動する」というのが，カナダ文化と言っても良いだろう。丁度，筆者がカナダに住んでいたころ，今では歴史上の人物になったあのトルードー首相は常に赤いバラの花をジャケットの襟にさし，白のベンツのオープンカーを自ら運転していたものである。トルードー首相は，若い頃にはカナダの東から西へとオートバイで横断したこともあり，カナダ人の中でも人並みはずれた行動力の持ち主であった。

　行動的な特徴は，もちろん公職に就いている人たちだけの特権ではない。一般のカナダ人も同様に行動的である。筆者の知合いに，カルガリーで結婚して，そこからトロントまで二人で交互に運転をして帰ってきたカップルがいる。途中で，ガソリンを入れて，ハンバーガーを買う時以外は走りっぱなしだったとのことであるが，確か三日間か四日間走りっぱなしだったそうで，車を降りてからも数日間は車に乗っているような感じだったと話してくれたことがある。

[42] 井上真蔵「板橋区とバーリントン市」，前掲，46 ページ。

これを聞いた時には，驚いたものである。板橋区と言えば東京23区の一つであり，そこの住民は都会人というイメージであったからである。しかし，日本ではたとえ東京の真ん中と言えども，まだまだ「年相応」という考え方があるのには，正直驚きであった。日本で生活している時は，周りがみんな日本人であるから，そんな「年相応」という考え方に縛られていると意識することはないのである。ところが，周りが全部カナダ人だという中で生活するようになると，日本では気付かなかった「その束縛」に気づくことになるのだ。そして，その束縛を脱ぎ捨てても，周りがカナダ人という環境の中では，もはや周りの目を気にすることはない。「それぞれが自分の好きな格好をしている」という光景が目の前にある訳であるから，日本社会の束縛から完全に解放されて，「こんなカワイイ格好をして良いんだ」という思いになり，お洒落を楽しむようになる訳である。理屈は抜きにして，二つの社会の違いを肌で感じ取り，そして即実行する訳であるから，カナダおよびカナダ人と接することのインパクトの大きさを感じない訳にはいかない。

(6)　主役はボランティア

市民訪問団でカナダの姉妹都市を訪れた人々は，既に触れたように様々な影響を受けている。カナダ社会におけるボランティアの存在とその役割も，正にそれらの内の一つである。例えば，板橋区の姉妹都市であるバーリントン市では，実質的には世界化委員会というボランティア組織が姉妹都市交流の全てを行なっている。そして板橋から区民訪問団が訪れた時には，一切合切このボランティア団体のお世話になる訳である。カナダを訪れた訪問団は，トロントやオタワやモントリオールなども観光で訪れるが，やはり一番印象に残っているのは，何と言っても姉妹都市バーリントンでの数日間の滞在であると言うことだ。その模様を板橋区の担当職員の方は，次のように語ってくれた。

> 区民ツアーから戻られて，ウチの方の財団のボランティアさんになられる方も多いんですね。そうしますと，もう何年も前の話なのに，このバーリントンの事って，よく話しますよね。あの時は，こうだったって。バーリントンの人達は，板橋区民が行くのを楽しみに待っててくださった，暖かく受入れてくださいます。スケジュール通りに行かないことがあっても，後はもうスゴク良かった，もうバーリントンが一番良かったってなるんですよ。バーリントンへ行った時は，ボランティアでここまで親切にしてくれて，ありがたいという感じですね[43]。

このような事は，単なる観光旅行であれば，決して起こりえないことである。姉妹都市交流を動かしているボランティアに接することにより，「自分たちがしてもらったのと同じような事を，

[43] 同上，48-49ページ。

今度板橋を訪れるバーリントンの人たちにもしてあげたい」と思うようになるのである。やはり，ここでもカナダでカナダ人の生き方に接することにより，それまでは考えもしなかったこと，つまり「自分たちもボランティアとなってバーリントンの人たちを迎えよう」というように，自らの生き方を変えているのである。まさに，姉妹都市交流が大きな影響を与えていると言っても過言ではない。

日本の社会では有る程度「他人の目を気にする」という側面がなければ，生きていくのは非常に困難である。しかし，「自分で物事を決めていく社会」でカナダ人に接してみると，「自分では物事を決めない日本社会の自分」を見つけることになるのである。このような事に気づくだけでも，自分たちとは異なる生き方をしている人達が居るのだということを認識することであり，非常に貴重な体験である。自分たちとは異なる者に接して，「物の見方」が変わるということであり，自分たちの生活や日本人の行動様式を客観視する視点を得るということでもある。

２．中学生の見たカナディアン・ウエイ

現在の日本では，普通の中学生や高校生が「公の場」で自らが行動し，そしてそれがどのような影響を持つのかを体験することは，ほとんど無いと言っても良い。しかし，姉妹都市を訪問するということは，日本では経験したくてもできない「そのような公的な場での体験」をする機会が身近にあるということである。これが，具体的にどのような事なのかを次に見ていこう。

⑴　公の場での行動

まず，東京都のある自治体では，約 30 名の中学生の訪問団を姉妹都市に派遣している。この中学生の一団が姉妹都市の市役所を訪れて，カナダ国歌『オー・カナダ』を披露した時のエピソードは，カナダで異文化と出会うということがどのような意味を持っているのかを見事に現している。昼休みに，市役所の職員の方々の前で，『オー･カナダ』を歌い始めた時，その場に居合わせたカナダ人全員が立ち上がったのである。もちろん前もって聞いていた生徒たちも居たのだが，実際に自分たちが歌うカナダ国歌を聞いて立ち上がるカナダ人を目の当たりにするのは，初めて経験することなのである。ある生徒は，「想像を絶するものでした」という言葉で表現している。もちろん，歌い終わると拍手の嵐である。こうして，30 余名の中学生たちは，公の場でどのように振る舞うのかということと，その場での自分たちの行為がどのような影響を与えるのかを自らの体で知ることになるのである[44]。

このようにカナダの自治体を訪れて『オー・カナダ』を歌う中高生の訪問団は，おそらく同じような経験をすることになると思われる。しかし，時にはもっと普通の「公共の場」でのカナダを体験することも起こりうるのである。それは，上に述べた同じ中学生の研修団がバンクーバー

[44] 井上真蔵「江東区とサレー市」，前掲，90-91 ページ。

に到着し，宿泊先のホテルで経験したことである。姉妹都市を訪れる前に，ホテルのプールサイドを借りて披露する合唱の練習をしていた時のことである。まさに感動的な光景が，その場に広がったのだ。引率の教員の次の言葉は，その時の様子を生き生きと表現している。

> 期せずして大歓声と大拍手が湧き上がったのです。泳ぎながら聞き入る人，窓を開けて眺める宿泊客，ベランダに出て聞き惚れる向い側のマンションの人々，そして一生懸命に歌う生徒たち…。それらのすべてが見渡せる位置にいた私には，まるで一幅の名画を見ているような光景でさえありました。ハーモニーといい，声量といい，そして歌う心といい，国内でも素晴らしかった合唱でしたが，現地へ来てこんなにも胸を打つものになるとは，生涯忘れられない感動のひとときでした[45]。

男子生徒と女子生徒の総計30余名の声量。音楽の先生の指導を受けて練習を重ねてきた成果の披露であり，まさに引率の教員が述べているように感動を与えるものであったのだろう。引率の教員にとっては誇りに思う出来ごとだったに違いない。そして，何よりも重要なことは，生徒たち自身の「行動」が大歓声と大拍手を引き起こし，宿泊客も向かいのマンションのカナダ人をも釘付けにしたということである。生徒たちは，自分たちが行動することにより，目の前の状況を切り開くことができるんだということを五感で感じることができたのである。

これらの他に，式典などで挨拶をするということも，様々な機会を通して生徒たちは経験することになる。上に述べてきたような事は，いくら望んだとしても，その機会がない限り，なかなか得られるものではない。このように，自分たちの行為が，相手に伝わっているという事実の認識と，行動することにより「目の前の状況が動く」という体験をするのである。そして，「伝わっているという確かな意識と感覚」は自信へとつながって行くのである。

(2)　カナダ流ホームステイ

日本の家庭で外国人のホームステイを引き受けるということは，普通はなかなか覚悟のいることである。だから，子供をカナダでホームステイをさせたいが，自分の家庭でカナダ人をホームステイさせるのは「ちょっと」と言う家庭も少なくはない。しかし，カナダ流ホームステイは，日本よりも遥かに容易に受け入れを行い，しかも自分たちの日常生活の中に受け入れるのである。日本の中高生たちは，このような日本とは大きく異なるカナダ文化を経験することになるのである。

まず，日本的基準では考えられないことであるが，ホームステイ先が突然変わることもあるし，生徒たちが空港に到着してもホストファミリーが出迎えにきていないというようなことも結構あ

[45] 江東区教育委員会『平成14年度江東区立中学校生徒海外短期留学報告書(第16回)』，2002年11月，7ページ。

りうるのである。ホストファミリーが休暇に行っていて，最初の間は別の家庭に泊まるような場合もある。あるいは，ホストマザーの日程の関係で，最後の日には違う家族と過ごすようなこともある。ホストファミリーの中には共働きも多いし，職種によれば夜勤明けの朝帰りというホストファミリーもいる。ある生徒は，次のように述べている。

> ファーザーの Jim が途中から仕事の都合で出かけてしまい，その後はマザーPat が，看護婦として忙しいのに，毎朝市役所に僕らを送ってくれました。本当に忙しい時は，マクドナルドで朝食をとった時もあった[46]。

また別の男子生徒は，シングルマザーの家庭にホームステイをして，次のように観察している。

> ベンの母親のドーナは毎日朝一番に起き，僕らが朝食を食べ終えた後，車に乗せて学校に連れて行ってくれます。しかし，午後の迎えの車は大抵は池谷君のパートナーのスコットの車か，スクールバスです。微妙な所で探究心の強い自分ですから，職業を聞いてみました。すると盲学校の教師なのだと答えてくれました。何だか，何とも言えない衝動に駆られました。毎日が大変なはずなのに，僕が家族の中に入り込んでしまったことに何も感じていないのだろうかと。しかしそれからも何時もと同じ優しそうで，明るく朗らかな笑顔は変わりませんでした。僕は，とても気丈なお母さんだと思いました[47]。

これらの事は，とても日本では考えられないことである。日本の基準であれば，こんな風に忙しい毎日を送っているのであれば，まずはホストファミリーになろうとは考えないのではないだろうか。しかし，カナダ人たちは，遥かに気軽に，しかも普段の生活を変えずに日常生活の中で受け入れている様子が伝わってくる。そして，自分たちで出来る範囲のことを行い，出来ない所は他のホストファミリーと協力し合っているということも，多いに学ぶ点であろう。

このように，中高生たちはカナダ流ホームステイに接し，まずは日本とは異なるお客の迎え方があることを認識している。そして，出来ることを，出来る範囲で，精一杯の受け入れをしているカナダ人の生き方に感激をするのである。これらの若者たちは，今度は自分たちが受け入れる番だという時には，カナダのホームステイ先で自らが学んだ体験を生かすことは間違いないだろう。

---

[46] 井上真蔵「牛久市とホワイトホース市」，前掲，87-89 ページ。

[47] 井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の分析 ── 世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係 ──」，『人文論集』（第 34 号），北海学園大学，2006 年（以後，「世田谷区とウィニペグ市」と略す），47 ページ。

(3)　家族のあり方

カナダを訪れた中学生たちは，カナダ人の家庭でホームステイをするのが一般的である。1週間か10日間ほどの期間だが,カナダ人の家族と時間と空間とを共にすることの意味は非常に大きい。カナダ人の家族の中に身を置くことにより，否応無しに日本では考えたこともない「家族のあり方」について考えることになるのである。

・夕食は家族一緒に

まず，カナダの家庭では，夕食は家族一緒にするのが普通のことである。つまり，父親は5時には仕事を終えて帰ってきて，家族と夕食を共にするのである。ウィニペグでホームステイをしたある女子中学生は，「4時半頃には父親が帰ってくるのが一番羨ましかった」と語り，そのような家族そろっての夕食への憧れを次のように表現している。

> 日本では朝早くに仕事に行き，夜遅くに帰宅する事が多いため家族そろって夕食を食べることが減っています。でもカナダでは毎日家族そろって夕食を食べました。日本でもいつかそうなると良いと思います[48]。

近頃の日本では，普通の日でも子どもたちは塾などに行くために，家族が一緒に夕食を囲むということ自体が珍しいことになっている。さらに，父親が夕食に間に合うように帰ってくることなども，現在の日本では考えられないことではないだろうか。こうして，父親抜きの夕食に慣れた日本の子どもたちにとっては，カナダの家庭の夕食風景はまさにショッキングなものなのである。そして，目の前のあまりにも異なる光景から，自分たちの日本の家族のあり方を考えるようになるのである。

カナダの家庭では，夕食が終わると父親も子どもも後片付けを手伝うのは自然な光景である。日本では，子供たちは自分が使った食器を片付け流しで洗うことも，普通はしないのではないだろうか。塾に行かないといけないかも知れないし，「勉強があるから」と言えば「立派な理由」になる。しかし，ホームステイ家庭では，みんなで後片付けをする光景が目の前に展開される。これでは，日本で何もしたことがなくても，手伝わない訳にはいかない。ホームステイをしたカナダの家庭で，初めてお皿洗いをするという経験をして，家族のあり方を考えて行くキッカケになるのである[49]。

・家族でビデオを

その他にも，家族ということについて考える機会がある。例えば，週末などには家族そろってビデオを見ることも珍しくはない。日本では家族揃ってビデオを見るということは，恐らく非常

[48] 井上真蔵「世田谷区とウィニペグ市」，前掲，43ページ。
[49] 井上真蔵「牛久市とホワイトホース市」，前掲，85-86ページ。

に珍しいことなのではないだろうか。かなり前の事になるが，「ヨン様ブーム」があった時には，母親は居間のテレビで『冬のソナタ』を見て，父親は別の部屋でゴルフ番組を見て，子どもは「子供部屋」でゲームをするという光景は，極めて普通のことであったのではないだろうか。テレビが数台あって，それぞれ自分の好きな物を見る事ができるので，家族みんなで同じビデオを見るという事自体が難しくなっていると言って良い。ところが，カナダではテレビは「ファミリールーム」にあるのが一般的である。そして，家族が揃ってテレビやビデオを見るのだ。家族揃ってビデオを見るには，自分一人が楽しむ訳ではないので，例えばホームドラマやみんなで楽しむ事ができるビデオを選ばなければならない[50]。見終わった後には，当然共通の話題が増えるのだが，これはカナダ人が「家族としての一体感」を維持していく仕組みと言えるかも知れない。もちろん，日本からの中学生たちは，カナダ人と一緒に生活することにより，家族のあり方の違いをハッキリと意識することになるのである。

⑷　自ら行動するということ

日本との大きな違いは「自ら行動するということ」── 中学生たちは，このような言葉で表している訳でもなく，明確に意識している訳でもないが，これは正に体全体で感じていることである。例えば，ホストファーザーと一緒に散歩をしていた生徒は，ホストファーザーの行動を見て，次のように述べている。

> Free Day の時，私の家族は湖へ行きました。私たちは，湖を散歩しながら，一周しました。途中に空き缶とペットボトルが落ちていました。それを見たホストファーザーは，それを拾ってゴミ箱へ捨てました。しかも，それらは急な斜面に落ちていて，すごく危険なことにもかかわらず拾ってました。私はそれを見て言葉をなくしました。こんな光景，日本では絶対見られないと思いました。カナダを愛する「愛国心」の強さに私は圧倒されました。そして，そういう心の持ち主に感心させられました。とても立派なファーザーでした[51]。

このカナダ人にしてみれば，多分，毎日している当たり前のことをしただけなのであろう。では，この生徒はなぜ言葉を失い圧倒されるほど，それほどまでに感動したのだろうか。それは，もし日本で空き缶が落ちているという同じような状況を考えれば，よく分かる。この生徒が「日本では絶対見られない」と言っているように，恐らく誰も拾おうとはしないことだろう。日本では自ら「拾おう」と思っても，まず周りの事が気になり，結局何もしないで終わってしまうのではないだろうか。この生徒は「愛国心」と言う言葉を使って説明しているが，「みんながしていな

[50] ウィニペグを訪問した世田谷区の中学生たちのホームステイでは，『ザ・シンプソンズ』や『フレンズ』などを見ていたようである。井上真蔵「世田谷区とウィニペグ市」，前掲，43 ページ。
[51] 井上真蔵「江東区とサレー市」，前掲，81 ページ。

いから自らは行動しない」という日本社会から来ると，「自ら行動して」空き缶を拾うという行為は，想像を越える行為なのだ。周りの目を気にせずに，自分の行動は自分で決めるというカナダ人の行為に，まさに圧倒され言葉を失ったのである。

カナダは自然でイッパイであるが，そんなカナダの中でもユーコンにあるホワイトホースは大自然の真っただ中にある。そのホワイトホースで2週間ホームステイをした高校生たちは，日本では経験したことのない毎日を過ごすと同時に，カナダ人の行動的な側面に圧倒されるのである。サイクリング，魚釣り，水泳，フットボール，アイススケート，ハイキング，カヌー，乗馬，ウォーターボード，モーターボートなどの毎日である。多くの高校生は，「2週間が1日ぐらいの速さ」で過ぎ去った感じだったと述べている。そして，その時の様子を，ある男子生徒は次のように述べている。

> ここに住んでいる人はみんなスポーツがうまい。Peterは私の弟と同い年だというのに，ついていくのがやっとだった。特にアイススケートでは北国育ちを感じさせるほどうまかった。また，カナダ人は老若男女を問わずスポーツが大好き。だから自転車でも一人2台持っていたし，ボートを持っている人もいた。日本人の場合は好きでも恥ずかしくてできないと言ってしまいがちだが，ここでは個性がすべてはっきりしていた[52]。

「日本人の場合は好きでも恥ずかしくてできないと言ってしまいがちだが，ここでは個性がすべてはっきりしていた。」と語っている。なかなか鋭い観察である。日本では，周りの人の目が気になって，初めての事はスポーツにしろ何にしろ，なかなか人前で「披露」するのは難しい。普通は，「下手な格好」をしたら「笑われる」と思ってしまうのではないだろうか。ところが，ホワイトホースでは，「個性がすべてはっきりしていた」と言う訳であるから，他人と違っていて当然であり，自分のやり方でやって当然であり，周囲の目を気にする必要なんか全くない。このような事は，ホワイトホースだけではなくカナダ全体についても言えることだと思われる。カナダに住んでみれば，日常生活の中で実感することである。例えばテニスを始めたばかりの初心者を頭に描いてみよう。サーブを返すことができないレベルなのに，何と「試合をしよう」と言ってくるのだ。まさに，自分の行動は「自らが決めて」，「自ら行動する」ということではないでだろうか。

「自ら行動するということ」，これは恐らくカナダ社会に根ざした文化だと言っても良いだろう。カナダには，テリー・フォックスというヒーローがいる。18才の時に，癌で右足の付け根から切断したのだ。ところが，この青年が義足をつけて，大西洋岸から太平洋岸までカナダ横断のマラソンをするから，癌撲滅のために寄付をしてくれと言って，走り出した。最初はマスコミの扱いも小さかったのだが，オンタリオ州まで走ってきた時には，まさにカナダの英雄になっていたの

[52] 井上真蔵「牛久市とホワイトホース市」，前掲，68-69ページ。

である[53]。そして，現在もテリー・フォックスの意志は引き継がれ，毎年マラソンが行なわれて癌撲滅のための募金がなされている[54]。また，1992 年 6 月，リオ・デ・ジャネイロの環境サミットにカナダから出席したセヴァン・スズキは「伝説のスピーチ」で有名である。わずか 12 歳で環境団体を立ち上げ，リオデジャネイロまで行って，大人の参加者たちをも感動させる演説を行なった[55]。このような事を，日本の中学生たちは知らないかも知れないが，自ら行動するというカナダ人の文化を，カナダの家庭でホームステイすることにより，五感で感じ取っていると言えるだろう。

⑸　生まれて初めての体験 ── 相手と真剣に向き合うこと

日本の中学生や高校生たちは，友だち同士ではよく話はするものの，家族や第三者に対して真剣に向き合って，「言葉を使って伝えあう」ということは，ほとんど無いのではないだろうか。しかし，カナダでホームステイをする中学生や高校生たちは，ホストファミリーに向き合って，全身全霊を使って伝えあうという事を経験することになる。

ある女子生徒は，次のように述べている。

> 私も何か話さないと悪いなと思い，話そうとしたけど，英語が頭からでてきませんでした。でも，さっき mother がやったようにジェスチャーと効果音などを交えて話すと，mother は一生懸命に理解しようとしてくれたので，英語も話すことに自信が持てたような気がしました。前までは，ジェスチャーなんて恥ずかしくてやりたくないと思っていた私が，この時はジェスチャーがないとやっていけないと思ったことに一歩成長したなと感じました[56]。

ほんとうに必死になって伝えようとする様子が伝わってくる。そして，ジェスチャーなんて恥ずかしいと思っていた自分自身を「乗り越えた」自分の存在を意識して，「一歩成長したな」と感じている。

別の中学生は，必死に伝え合おうとする様子を，次のように述べている。

> 自分の言いたい事がうまく伝わらない時だってあった。うまく言えない自分が悔しかった。それでも私の言いたいことを理解しようと一生懸命話を聞いてくれた人達がいた。ジェスチャーや単語を並べて必死になって説明し，伝わった時は自分だけでなく，聞いてくれて人

---

[53] 当時，筆者はトロントに住んでいので，毎日テレビの前で釘付けになり，テリー・フォックスの走る姿を見ていたものである。テリー・フォックスの写真を見ると，今も「ガッチャンコ，ガッチャンコ」と，義足をつけた足で走る音が耳に聞こえてくる。

[54] The Terry Fox Foundation のホームページ。http://www.terryfoxrun.org/english/about%20terry%20fox/facts/default.asp?s＝1。

[55] http://www.youtube.com/watch?v＝C2g473JWAEg。

[56] 井上真蔵「江東区とサレー市」，前掲，78-79 ページ。

たちも一緒になって喜んだ[57]。

ホストファミリーの人たちも，ゆっくりと何度も繰り返したり，違う言い方をしてくれたり，伝えようという態度がはっきりと分かる。日本の中学生たちは電子辞書などを頼りにして必死に伝えようとするのは分かるが，ホストの人たちの中には，自ら「英和辞典」を用意している家族もあり，相手側の真剣さが伝わってくる。

多かれ少なかれ，生徒たちの多くは，これと似たような経験をしている。カナダの家庭の中で，ホストファミリーと日々接触することにより，カナダ人が「どのように接してくれたのか」を，身をもって学ぶのである。そして，ある生徒は，「自分は今まで，こんなに丁寧に人と接していなかった」と述べている[58]。

これらのことは，異文化の中に身を置くことにより，初めて可能になることなのだ。日本では，必死になって，相手の言っている事を聞こうとしたり，相手に言葉やジェスチャーを使ってまで説明しようとすることはあり得ないことだ。分からなければ，「ま，いいか」で済んでしまうし，何かを聞かれても，「別に…」と答えれば，それで済んでしまうのではないだろうか。

わずか10日余りのホームステイであるが，生徒たちは自分たちが想像もしなかったことを経験し，この短い期間で大きな変化をし，そのことを本人たちも実感している。ある生徒は，次のように話している。

> ホストファミリーと会って沢山のことを学びました。特に「人のことを大切に思う気持ちが重要なんだ」ということでした。今まで私は，人のことを第一に考えていなかった気がします。…ファミリーから学んだことを全てこれからの生活，高校，大学，就職と成長していく中で活かして，今の自分よりも，もっといい自分に変われたらいいと思っています。これは，とても難しいことですが，でも，時間はかかるけれど頑張れば，きっと変われると私は信じています[59]。

僅か10日余りのホームステイであるが，若い人たちは今までにはない体験をしてきている。カナダでのホームステイという異文化空間の中で，既に触れたように大人たちも大きな影響を受けているが，それ以上に大きな影響を受けるのが中学生たちの場合である。それは将来の進路や人生に変えうるほどの大きな影響であると言うことができる。このような点においても，ビジネスとしてのホームステイとは本質的に異なるのが，姉妹都市交流におけるホームステイなのである。

---

[57] 井上真蔵「世田谷区とウィニペグ市」，前掲，71-72ページ。
[58] 井上真蔵「江東区とサレー市」，前掲，82ページ。
[59] 同上，83-84ページ。

３．担当職員の見たカナディアン・ウエイ

日本側の姉妹都市を担当する職員の方々の中には，何年にもわたり姉妹都市交流を担当してきていても，カナダには一度も行ったことがない方が居ない訳ではない。しかし，５周年ごとに市民訪問団を派遣したり，板橋区のように毎年のように市民訪問団を派遣する場合には，カナダを訪れたことのある職員の方が多い。これらの職員の方々は，一般の市民の方々とは異なり，「自治体職員としての目」でカナダやカナダ人を観察することになる。それでは，これらの担当職員が，どのような側面を見て，どのように感じているのかを見ていこう。

⑴　アバウトなカナダ方式

日本側の担当職員は，訪問団の派遣や受入れに際して，カナダ側の担当者と連絡を取り合わなければならない。姉妹都市交流を担当して日が浅く，カナダ側との接触が初めての場合には，日本人を相手にするのとは「まるで勝手が違う」と感じるようである。連絡をしても，なかなか返事が来ないとかは，担当職員の口からよく聞かれることである。日本からの訪問団のホームステイ先が出発の間際になっても決まっていないとか，カナダに到着した後にホームステイが変更されると言ったことも，珍しい話ではない。また，訪問団を派遣するにあたって，担当職員の方が随行員となってカナダを訪れることも一般的であるが，実際に現地に行っても最初は戸惑うことが少なくないようだ。ある担当職員の方が話してくれたことだが，一般的に「十分刻みのスケジュール」が普通の日本式からすれば，カナダ式は「この日はここに行きます」というだけで細かいことは分からず，最初は不安で仕方がなかったとのことであった[60]。

このように日本と比べれば，まさにある担当職員の方が述べたように「アバウト」と言う言葉がピッタリと当てはまる。それが，どのような意味なのかは，次の青少年の国際スポーツ大会のエピソードを見れば理解ができる。日本と，何がどのように違うのかが，鮮明に現れている。バーリントンで行われた青少年の国際スポーツ大会に，子供たちが付き添いの親御さんたちと共に参加した時のことである。何と，２時間待っても開会式が始まらなかったのだ。とても「日本の常識」では考えられないことである。日本側の担当者の目には，カナダ側は「その場で何でもしようとする」と映るようだ。そして，何度か同じような事を経験することにより，普段よりも入念な「段取りとコーディネート」を行ない，この「アバウトなカナダ方式」に何とか慣れるようになるのである。しかし，初めて訪問団に参加する子どもたちや，その親御さん，あるいは一般の日本人にとっては，とても信じられない事なのだ。そして，何時始まるか分からない開会式を待ちながら，つい「連絡は事前にキッチリとしてあるのか」などと，イライラと疑問とを随行の担当職員にぶっつけることになるのだ。最初の間は担当職員の方もハラハラドキドキだったようだが，慣れてくるとカナダ側と日本側の双方の事情や言い分が分かるようになるので，「カナダ側の

[60] 井上真蔵「世田谷区とウィニペグ市」，前掲，30 ページ。

遅れも日本側の苦情も全てひっくるめて」対応できる度胸と能力を身につけるようになるようである[61]。

(2)　ボランティアが物事をうごかす

日本から姉妹都市担当の職員の方が，カナダを訪れてビックリしたりまた羨ましがったりするのに，ボランティアの存在がある。日本とカナダとの姉妹都市交流において，日本側は自治体の補助もあり職員の方々が連絡調整などの仕事を担当しているのが一般的である。しかし，カナダ側は行政が関わっているというよりは，むしろ姉妹都市委員会などの民間の団体やボランティアが関わっているのが普通である。例えば，先ほど触れた親善スポーツ大会の企画・立案・実施も全て民間のボランティアの人たちの手によってなされたものである。このことを知っていると，「2時間遅れだとしても」非常によくやっていると感心し，さらには尊敬の念も抱くことになるのである。そして，実際にそのようなカナダ人たちが物事を動かして行く現場に立ち会ってみて，日本のボランティアとの違いを明確に認識することになるのだ。日本のボランティアは，役場の手伝いはするけれども，自分たちで「責任をもって企画･立案し，最初から最後までやり遂げる」という段階には，とても到っていないとのことである。そして，このような体験をすることにより，「行政が物事を動かす」日本社会と「市民が物事を動かす」カナダ社会との違いを明確に意識するようになるのである[62]。

(3)　民主主義の基礎 ── 自立する市民

カナダ側の自治体を訪れた日本の自治体の職員の方が驚くものの一つに，自治体の役割の違いがある。まず役場を訪れて一番最初に目に入ってくるのは，役場の「建物」自体である。ある自治体の職員の方は「何しろ市役所が小さいですからねー。いかに市民が政府を作っているかって言うか，自立しているかって言うのが，よく分かりますよ」と述べている[63]。ほんとうに，日本の立派な建物を想像していると，ビックリ仰天してしまうだろう[64]。そして，次に建物の中に足を踏み入れて，ちょっと話を聞いて周囲を観察するだけで，カナダの自治体の職員が扱う仕事の量と質が，日本の場合とはあまりにも異なっているのに驚くことになるのである。板橋区の職員の方

[61] 井上真蔵「板橋区とバーリントン市」，前掲，52-53ページ。
[62] 同上，51-52ページ。
[63] 同上，50ページ。
[64] 筆者自身，ブリティシュ・コロンビア州のある小さな町の役場を訪れた時に，ほんとうにビックリしたことがあった。教えてもらった住所の辺りを車で2度も3度も行ったり来たりしても，役場が見当たらなかった。約束の時間を30分も過ぎても見つからず焦っていたところへ，カナダ側の方も心配して外に出てきてくれて，やっと「そこ」が町役場だと分かったのである。ほんとうに，2度も3度も町役場の前を通っていたのだが，「普通の民家」だと見間違うような建物だったので，全然分からなかったという訳である。何よりも一番の原因は，日本では小さな町にしろ，役場の建物は非常に「立派な建物」が普通なので，無意識のうちに「立派な建物」を探していたという訳であった。

は，次のように語っている。

> カナダの市役所の一般の事務の人たちというのは，コーディネート能力というのは全然いらない。ただ決められて手続きの事をやって，書面にハンコ押したりとか，それだけですよ。ウチで言うと出張所か支所みたいなものですね。これが市役所なんですよ。いかにこれだけで間に合うということなんですね[65]。

前述のボランティアの存在と相まって，ここにも「市民が行政に何をどのように期待しているのか」が現れている。日本のように行政の役割が非常に大きい社会と，カナダのように行政の役割が非常に小さい社会との違いを，「自治体の職員の目」を通して認識し，理解しているのだ。そして，カナダ社会でそのような事が可能なのは，「市民が自立しており，その市民が政府を作っているから」との解釈に至っているのである[66]。

このように自治体の職員の目を通して，姉妹都市に関わる職員の方々は日本国内では得られないような様々なことがらを学んで来ている。既に触れたように，なかなか連絡がこないなどのケースは決して珍しいことではないのだが，日本側の担当者が慣れないうちは，日本の自治体の公務員としての基準しかないので，カナダ側の担当者との連絡調整には違和感を感じるようである。ある自治体の担当者は，「カナダはあんなことで，よく国家が運営できるな！」と言うほど，日本的基準からすると，とても理解できないこともあるようだが，残念ながら何があったのかは具体的な話の内容までは聞くことができなかった[67]。しかし，一般的に長年姉妹都市交流を担当して，カナダ側の担当者とやりとりをしていると，お互いのやり方の違いが理解できるようになる。行政の仕組みと役割が異なっていることが分かるようになり，特に日本側の担当者は「どのような段取り」を「どのように行なうのか」というコツを掴むようになってくるのだ。そして，市民訪問団派遣などの事業を一つひとつ実施するたびに，カナダ人を相手に「どのように物事を行なって行くのか」という異文化インターフェイスとも言うべき資質を身につけていくようである。

このような資質は，従来の日本の自治体職員にはあまり関係のないことであった。しかし，既に触れたように，市民訪問団に参加している一般の日本人には理解することが不可能なような出来事が起こった場合にも，自信をもって随行員として文化的通訳とでもいうべき役割を果たすことができるのである。そして，このような能力と資質は，視点を変えれば，地域社会の中に外国人定住者が増加している状況の中で必要とされているものでもある。つまり，これまでは言葉でもって説明することは必要ではなかった文化的な違いを，言葉でもって説明して行かねばならない時代になっており，そのような状況下で必要とされる能力なのである。

---

[65] 井上真蔵「板橋区とバーリントン市」，前掲，49-50 ページ。
[66] 同上，50-51 ページ。
[67] 相模原市でのインタビュー。

III．姉妹都市交流の成果 ── 交流成果をどう活かすか

既に触れたように，カナダを訪問してカナダ人に接した市民も，中高生も，担当の職員の方々も，日本では考えられないような様々な体験をしてきている。明確な言葉では表現されてはいないものの，そこには共通して見られる一つの重要な事柄がある。それは，「みんなで動かないと動けない」日本社会のあり方とは全く異なっている，「自ら動けば物事が動く」というカナダ人やカナダ社会との出会いである。

市民訪問団の方々は，自分たちで動かす「持ち寄り形式」の歓迎方式に出会ったり，「自ら行動するカナダ人」に出会っている。「他人の目を気にする」日本人が，「自分の行動は自分で決める」カナダ人の中に入って，自らの行動が変化するようになっている。そしてカナダのボランティアによるもてなしに感激して，帰国後は自分も同じようにカナダ人を歓迎しようと思い，ボランティアに参加した人についても見てきた通りである。

中学生や高校生の若い人たちも同様に，「自ら動けば物事が動く」というカナダ人の行動様式に影響を受けてきている。いや，むしろ中高生の方が大人たちとは比べ物にならないほどの，大きなインパクトを受けていると言う方が正しい。日本の家庭でも学校でも教わることのない「家族との関わり方」や「他者との関わり方」において，自らが行動していくことを身をもって学んできている。さらに，公の場やカナダ人の一般大衆の前で，自ら行動することにより「目の前の状況」が変わっていくことも全身でもって体験してきている。そして，ホームステイにおいて，ホストファーザーの日常の行為の中に「自ら行動するカナダ人」を見いだし，そんな行為が社会に影響を及ぼしていることを学んできているのである。

担当職員の方々も，同様に「自ら行動するカナダ人」を見てきている。既に述べたように，カナダ側の姉妹都市交流を担当する部門は，民間のボランティアによる場合が多い。そして，バーリントンの場合のように，民間のボランティアが責任を持って姉妹都市交流の全体を動かしている場合もある。さらに，小さな役場の建物が象徴しているように，行政の役割が日本の場合ほど大きくはないということも認識している。そして，市庁舎内の様子からも，「市民が自立しており，その市民が政府を作っているから」，行政の役割は大きくはなく，自立し行動する市民が社会を動かしているとの判断に至っているのである。

1．自分も何か役に立つことをしたい

さて，このような体験をしてくると，みんな一様に心のどこかで，「自分も何か役に立つことをしたい」と思うようになったとしても，決して不思議なことではない。実際に，市民の方の中にはボランティア活動に参加するようになった人もいる。担当職員の方も，ボランティアが動かしているカナダ社会を目指すべきモデルであると考えて，「ボランティアが育ってほしい」という思いを抱いて努力をしている。中学生や高校生も，「カナダでしてもらった事を，今度は僕たちがす

る番だ」という気持ちになって，はりきっている。しかし，「何か物足りない」というのが，これらの多くの人たちが感じていることではないだろうか。カナダの一般大衆の前で歌った時のように，自分たちの行動が目の前の人々に伝わり，自分たちを取り巻く状況を変えることができるんだという感覚とは程遠いのではないだろうか。みんなが，貴重な体験をして，「何か役に立つことをしたい」という意思とやる気を持ちながらも，残念ながらそれらの思いが生かされずに，バラバラに存在しているのが現状であると言えるだろう。これは，あまりにもモッタイナイことだ。一人ひとりの貴重な体験と意思とやる気を結びつける知恵とノウハウはないものだろうか。

２．個人の経験・意思・行動を結びつけるハードとソフト

まず，カナダでつかんできた体験，情報，知恵が地域には蓄積されてはいるが，それが十分に生かされてはいないということを認識することが必要である。そして，これらの体験，情報，知恵を活用し大きく育てていくには，それらを共有し，拡散し，集積し，姉妹都市交流に役立てるための「場」の存在が必要となってくる。同じ体験，同じ思い，同じ興味関心を持った人たちが，顔を合わせることができる空間の存在は極めて重要である。姉妹都市交流の体験者や興味関心のある方々が顔を合わせ，疑問を出したり，情報の交換ができたり，お茶を飲みながら話ができる場所が大切である。それは，姉妹都市友好協会などがあれば，その一部を活用することで十分であり，大げさなスペースを確保することは特に必要ではない。要は，そこに行けば，姉妹都市活動の過去・現在・未来に関する知識と情報があり，自分たちも貢献できる場だという認識が生まれることが最も大事な点だからである。

さて，そのような場所が確保されたなら，情報を「目に見える形」で扱えるようにする工夫をしなければならない。それには，簡単な掲示板の設置で十分であり，適切な方法でもある。この掲示板は，「その場」に行けば，目に見える形で「何が行なわれているのか」が分かるような仕組みである。まず，掲示板には関連するさまざまな情報や質問，あるいは連絡やお知らせなどを張り出すことができる。例えば，カナダの姉妹都市から個人的に来訪する人がいるとしょう。そんな場合，ホームステイを引き受ける人は，次のような「お知らせ」を貼って，みんなに知らせることができる。

来月の終わりにトム・シンプソンがご夫婦でやってきます。下記の日時でバーベキューの予定です。参加希望者は電話番号の部分を切り取って，参加の連絡をしてください。

＊(「お知らせ」は，下の写真のような形式にすることができる。興味のある人は，下の電話番号を千切ってもっていくのである。この〝Moving Sale〟の掲示は，たまたまカナダのブロック大学のキャンパスで見かけたものである。)

このような方法は，日本ではあまり馴染みがないが，カナダで「自ら行動する」というカナダ

文化を経験してきた人たちにとっては，納得のいく方法だと思われる[68]。切り込みを入れた箇所に電話番号が書かれていて，それを千切り取っていけば電話番号を書き写すことなく電話をかけることができる。そして，千切り取られた電話番号が 4 片であれば，「興味のある人は 4 人居る」とか，それを見た他の人たちも「現在進行中のこと」が分かるという仕組みである。

さて，こうして催されたバーベキューでは，どのようなことが起こるのだろうか。新しい料理のレシピが交換されたかもしれないし，また，カナダからやってきたシンプソンさんと話が弾んで，「それでは滞在中にウチにお招きします」ということになったかも知れない。そして，もちろんデジカメで何枚も写真を写したことでしょう。今度は，デジカメの写真を何枚か選び出して，

[68] カナダで生活していると，不要品処分の〝garage sale〟や〝moving sale〟あるいは「車の売り買い」や「家庭教師求む」，「ベービーシッター求む」など，実に様々なものを見かける。見知らぬ個人と個人とが，「共通の問題（例えば，売りたい車と買いたい車）」を解決するためのコミュニケーションの方法だと考えられる。あるいは，それぞれの目標を達成（売りたい車，買いたい車）していくためのコミュニケーションの方法だと考えて良いであろう。まさに「自ら行動」して目の前の問題を解決していく方法なのだ。例えば，トロント大学のキャンパスには，「一戸建の共同居住者を求む」といったものや，「夏休みにバンクーバーへ帰るので，運転とガソリンを折半できる者を求む」などの張り紙も目にしたものだ。また何年か前のことだが，ブロック大学に学生の引率で行ったことがある。宿泊先はキャンパス内の学生寮だったが，同じ棟にドイツの大学を卒業して英語の勉強をしに来た若者がやってきた。やってきて僅か三日目には中古の自転車を手に入れていた。自転車があると行動範囲がずっと広くなり，アパート探しにも便利になる。それで，新学期が始まる前にアパートを探して落ち着こうという訳である。今述べた自転車も，キャンパス内に張り出されていた〝For Sale〟を見て，まず電話をかけて，出かけて現物を見て，交渉して手に入れたとのことであった。

ちょっとした説明を加えて，掲示板に張り出すこともできる。そうすれば，何が起こっているのかが，その場を訪れる人にも分かり，そこからまた新しい関係が生まれてくるかも知れない。シンプソンさんの住所と e-mail アドレスも書いておくと，さらにコミュニケーションの輪が，カナダまで拡大していくことになるかも知れない。

このようにして，興味関心のある人びとは，掲示板のこれらの情報を見て何が行なわれているのかを知ることができるのである。しかも，「あんなことをしている」，「こんな事をしている」と分かるだけではなく，「あんな事もしてイイんだ」，「こんな事をしてもイイんだ」と感じるのではないだろうか。この意味は非常に大きい。丁度カナダを訪問して，「自ら行動する」という事に出会った人たちと同様の感覚ではないだろうか。その感覚があれば，物事を動かせていくことができるのではないだろうか。「とりあえず自分のできる事を一つやってみる」という「小さな一歩」は，物事を動かしていく「大きな一歩」になる可能性を秘めているのである。

３．姉妹都市交流の経験・意思・行動を結びつけるネットワーク

⑴　カナダで得た体験・情報の活用ネットワーク

10 年，20 年と姉妹都市交流を続けている自治体では，もうすでに何百人もの中学生や高校生たちがカナダの体験をしてきている。しかし中高生たちの体験は帰国後の報告書という形で公にはなるが，残念なことにそれらが後輩たちや地域の人びとの間で共有されるということはないのが現状であろう。これらは，まさに地域に眠れる貴重な財産であり宝物であると言えるのではないだろうか。

個々バラバラに存在する貴重な体験と「役に立ちたい」という意思を活用するには，まずはそれらの体験の持ち主の名簿を作るという事が必要なことである。例えば，中学生や高校生でカナダへの派遣団に参加した過去の名簿とアドレスが基本的なデータになる。もちろん，個々の参加者の承諾を得ることが必要であり，名簿とアドレスが作成されると，参加者全員に配布されることになる。こうすることにより，同じような体験をした仲間と連絡を取ることが可能になるが，この意味は非常に大きい。例えば，５年前に参加した先輩が今どこで何をしているのかが分かるようになる。地元に居る場合もあるだろうし，日本のどこかで働いているかも知れない。あるいは，日本以外で仕事をしているかも知れない。いずれにせよ，インターネットのおかげで，どこで生活をしていようが，連絡は簡単である。このように，空間を越え，時間を越えて，同じような体験をした者同士が連絡を取り合うことができるということは，それ自体で自治体の大きな財産となるのである。これらの若者たちは，自分たちがカナダでホームステイを体験できたのは，地元の役場をはじめとして多くの関係する人たちのお陰だと認識し感謝の気持ちを抱いている[69]。従って，現在この地球のどこに居ようと，自分たちが世話になった姉妹都市交流プログラム

[69] 井上真蔵「世田谷区とウィニペグ市」，前掲，81-91 ページ。

の発展に関しては知恵と援助を惜しまないことであろう。また，これから行こうとしている後輩たちに対しても，自分たちの経験を伝えることができ，助言をすることもできるだろう。

(2)　市民訪問団とホストファミリーのネットワーク

市民訪問団に参加した人たちについても，地域に眠る財産である。同じように名簿とアドレスを作成すると良いのではないだろうか。同じ地域に住みながらも，しかも同じような体験をカナダでしていながらも，なかなか顔を合わすこともなければ，連絡をしあうこともないというのが現状ではないだろうか。従来のように自治体の担当職員が全てを集約するという形よりも，訪問団に参加した人たちが「自ら行動」することにより，地域を横断する活発な関係が生まれてくる可能性がある。

さらに，訪問団に参加してカナダに行ってきた人たち以外にも，カナダやカナダ人に対する興味関心を抱いている人たちが地域の中に存在している。それは，本論では取り上げはしなかったが，これまでカナダの姉妹都市からやって来るカナダ人たちを受け入れてきたホストファミリーの人たちである。カナダという空間ではないけれども，同じようにカナダ人に接してきた人たちである。しかし，これらの人たちも，それぞれ受け入れの知恵とノウハウとを蓄積しているにもかかわらず，それらがバラバラの状態で存在しているということが多いのではないだろうか。ホームステイのリストとアドレスを作成すれば，個々バラバラの知恵とノウハウが共有される切っ掛けになるのではないだろうか。お互いの間で「成功した料理のレシピ」の交換や，受け入れの際のちょっとしたコツなども共有されることであろう。

既に述べたように，市民訪問団に参加しカナダで姉妹都市交流を体験してくると，自分も何か役立つことをしてみたいと思うようになる人たちも珍しくはない。そんな人たちが，例えば，ホームステイを引き受ける気持ちになった場合には，上記のようなチャンネルと人間関係があれば，そこにアクセスすれば良いのである。既に蓄積された「成功した料理のレシピ」や「受け入れのノウハウ」が，そこには存在しているのである。そして，そんな風に「自ら行動する」大人の姿は，子どもたちにとって手本にもなるし，地域を元気にする活力源にもなるものと思われる。

(3)「目で見て分かり」成長するシステム

今まで述べてきたネットワークは，ネットワークで結ばれた者同士にとっては，参加者名簿の開示により，誰が参加するどのようなネットワークなのかを知ることができる。そして，インターネットを通じて，日本国内のみならず国外にも瞬時に結ばれる。しかし，インターネットのネットワークだけにしてしまうのは，あまりにもモッタイナイことである。参加者の名簿やアドレスは，上に触れた掲示板にも張り出せば，自治体の姉妹都市に関する人的資源が「目に見える形」で共有されることになるのだ。それは，過去の姉妹都市交流の実績と成果であり，それは明日に架ける橋ともなりうるものなのだ。さらに，カナダ側の姉妹都市交流関係者の名簿やアドレスも

掲示板に張り出すことができれば，ネットワークはさらに大きく発展していくことだろう。姉妹都市交流に参加したり，興味関心を持つ人たちは，このネットワークを通して，自ら行動することにより，「行動する意味を認識」するとともに，より豊かな関係を創り上げていくことになると思われる。

最後に筆者の体験した一つのエピソードを示して，締めくくりとしよう。もう随分と前のことになるが，姉妹都市の調査にカナダの都市を訪れた時のことである。当時，カナダの大学関係ではインターネットが使われ始めていたが，日本ではまだ皆無の時代であった。訪問先の自治体や姉妹都市協会の担当者への連絡は，主にファックスと電話で行ったものである。家族と一緒に2ヶ月間で，北海道内の自治体と姉妹提携にある10カ所余の市町村を訪れたことがあるが，どこの市町村に行っても姉妹都市協会の担当の方々は快く歓迎してくれたものである。もし筆者が北海道内のいずれかの自治体の出身であれば，帰ってきてから「カナダでの出来事」を掲示板に張り出して共有できたことであろう。こちらの目的と意思を明確に伝えれば，カナダの姉妹都市の方々は喜んで歓迎してくれる。市民訪問団で行くのも良いし，中高生の研修で行くのも良い。しかし，こんな風に個人的に行くことも可能なことである。そして，帰ってきてから掲示板にフィードバックすれば，そこから「しっかりとした」交流のネットワークが育っていくのではないだろうか。

このような姉妹都市交流に関する人的ネットワークは，それに参加する個人にとってのみならず，関係する自治体にとっても誇るべき貴重な財産になるものと思われる。そして，このようなネットワークを作り，維持し，発展させていくことこそが，一人ひとりの個人を元気にし地域をも元気にすることにつながっていくと言うことができるだろう。

おわりに

本論では，まず姉妹都市交流にとって激変する環境の特徴を把握し，そのような逆境の中だからこそ民間ではできない姉妹都市交流の特徴と本質を再認識し再確認することが重要であることを指摘した。そして，姉妹都市交流が参加した人びとに「どのような影響」を与えてきたのかについて，様々な事例を取り上げて論証してきた。さらに，往々して見逃されている地域に眠る姉妹都市交流の知識・経験・ノウハウを明日に向けて活用する方法についても述べてきた。ここでは，これらの中から重要な三つの点を指摘して結びとしたい。

まず第一は，姉妹都市交流を取り巻く環境は非常に厳しいが，そのような逆境の今だからこそ，姉妹都市交流の持つ意義と本質の再認識と再確認が必要であるという点である。まさに激変する環境の中で，姉妹都市交流の存在意義そのものが問われているのである。財政的補助の削減とともに交流プログラムも削られる傾向にあり，姉妹都市交流という「外なる国際化」は外国人定住者への対応という「内なる国際化」を前にして影が薄くなっている。加えて，「民間でできることは民間に」という表現が世間を覆うスローガンとなっている状況下では，姉妹都市交流の意義に対して大きな疑問符がついているのである。多くの人たちにとって，姉妹都市交流が「実際どの

ようなもので，どのような影響をもたらしているのか」について知られてはいない。その人たちにとっては，「民間でできることは民間に」という論理とキャッチフレーズは「もっともなこと」だと感じられるかもしれない。だからこそ，今ここで「姉妹都市交流の特徴と本質」を再認識しておくことが重要なのである。極めて簡単に言えば，「民間でできることは民間に」ということは，「ビジネスとしてのホームステイ」ということなのである。これを否定するつもりは全くないのだが，「ビジネスとしてのホームステイ」と「姉妹都市交流のホームステイ」とは，本論で指摘したように根本的に異なるものなのである。「ビジネスとしてのホームステイ」は言うまでもなく「利益追求」であり，「姉妹都市交流のホームステイ」は「友好･親善」である。このような根本的な違いの結果，「ホームステイ」という言葉は同じでありながらも，その質的な違いは本論で述べた通り歴然としている。さらに，姉妹都市交流による派遣は，当然のことながら「自治体の代表」という性格を持っている。その結果，大人であれ中高生であれ様々な「公的な場」に参加し「普通では得られない経験」をするのである。これらの決定的な違いについては，姉妹都市交流に関わっている方々がまず明確に認識するとともに，姉妹都市交流に関心を持つ人々や地域住民に知ってもらうことが何よりも重要なことである。

次に重要なのは，これまで蓄積されてきた姉妹都市交流の成果の再認識と再確認，そして姉妹都市交流の影響について，広く知ってもらうことである。姉妹都市交流の中でカナダという異文化に触れることにより，どのような影響があったのかについて詳述したが，これは姉妹都市交流の実績であり成果に他ならない。市民や中学生・高校生，そして担当職員たちが，異文化としてのカナダに接して「どのような影響を受けたのか」について，具体例をあげて述べてきた。様々な事柄を，それぞれの目線と立場で観察し，日本とは異なる「物事のやり方」と「カナダ人の生活の仕方」を体験してきている。それらの中でも共通しているのは，「カナダ的受け入れ方」であり，「カナダ的家族のあり方」であり，「自らの判断で行動するカナダ人」など，まさにカナダ文化の衝撃とも言えるものであろう。そして，これらのカナダ人の行動様式に触れることにより，大人の場合も青少年たちの場合も同様に「自らの行動を変化させる」という実に大きな影響を受けているのである。例えば，大人の場合には，今まで「年相応」という「世間一般の基準」で決めていた服装を，「他人の目を気にするのではなくて，自らの判断で決める」というカナダ的行動様式に影響を受けている。とりわけ，中学生たちの受ける影響は，若くて柔軟な時期だけに極めて大きいものである。ホストファミリーと生活する中だけではなく，公式の場での行事に参加することによっても，「自ら行動することにより，目の前の状況を変えていくことができる」という感覚をつかみ，実際に「自分の行動がもたらした影響を認識すること」により，自信を身につけるようになっている。ホストファミリーと生活することによっても，相手と「向き合って，全身全霊を使って伝えあう」という経験をするのである。今日，日本の若者がこのような経験をする場は，日本社会のどこかに存在しているだろうか？　残念ながら，恐らく皆無であろう。まさに，姉妹都市交流によりカナダのホストファミリーと生活空間を共にするという状況だからこそ，起

こりうることなのである。本論では既に詳述したことであり，もう，ここではこれ以上述べるつもりはないが，このような姉妹都市交流のもたらす影響は，関係する人々により再認識されることが極めて重要なことである。同時に，姉妹都市交流は「民間のプログラムと変わらない」と思っている人々も多い訳であり，このような影響については広く知ってもらうように関係者の方々は努力をすることが重要だと思われる。

最後に，姉妹都市交流を行ってきた自治体は，その地域内に眠る埋もれた人材と資源の存在に気づき，それらを未来に向けて活用していくという認識が，極めて重要なことである。姉妹都市交流はこれまで様々な成果をあげてきたにもかかわらず，その成果は具体的な形で生かされてはいない。一般的に，姉妹都市交流について言えば，担当職員の方も関係者の方々も，市民や青少年の派遣団を企画・実施して，事業が無事終わり報告書を作成した段階で一件落着である。既に触れたところであるが，これでは余りにもモッタイナイ。カナダという異文化に触れてきた人たちは，市民であれ中高生であれ，「自ら行動することにより，目の前の状況を変えていくことができる」という経験をしてきているのだ。そして，一様に「自分たちも何か役に立ちたい」という気持ちを抱いている。長年にわたり姉妹都市交流を続けて来ている自治体では，このような経験をしてきた人たちは，もう何百人といるはずである。その人たちは，地元に居るかも知れないし，地元を離れて日本のどこかに居るかも知れない。さらには，日本以外のどこかに住んでいるかも知れない。しかし，今現在どこに居ようとも，自分たちの「物の見方を大きく変えてくれたカナダでの体験」を忘れることはないのである。かつて自分たちを送りだしてくれ「このような体験」を可能にしてくれた地元に対して，「役に立ちたい」と思う人たちが存在するのである。まさに，埋もれる人材の宝の山である。これらの人々を結びつけるには，本論で述べたように多少の工夫とノウハウとが必要である。そして，そのような「一歩を踏み出すこと」こそが，さらに姉妹都市交流を押し進めていく活力となり，地域全体を元気にしていく核となることであろう。

聞き取り調査資料

・板橋区役所政策経営部国際交流課，2002 年 11 月 10 日。
・岩槻市役所，2003 年 12 月 15 日。
・ケネル市役所（BC），1994 年 9 月 19 日）。
・江東区立第三大島小学校，2002 年 12 月 10 日。
・相模原市役所，2002 年 9 月 17 日。
・鹿追役場，1987 年 12 月 2 日。
・広島カナダ協会，2007 年 10 月 30 日。
・横浜市国際交流協会，2002 年 12 月 2 日。
・リンゼイ市役所（オンタリオ），1994 年 8 月 16 日。

参 考 資 料

・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係 ── 何を学ぶか ──」，『めいぷる』北海道カナダ協会会報第 71 号・

創立 25 周年記念号，北海道カナダ協会，2004 年。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ── 板橋区とバーリントン市のケースについて ──」，『人文論集』(第 37 号)，北海学園大学，2007 年。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ── 牛久市とホワイトホース市のケースについて ──」，『人文論集』(第 31 号)，北海学園大学，2005 年。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ── 江東区とサレー市のケースについて ──」，『人文論集』(第 26・27 合併号)，北海学園大学，2004 年。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の分析 ── 世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係 ──」，『人文論集』(第 34 号)，北海学園大学，2006 年。
・井上真蔵「国際化の一側面 ── 北海道とカナダとの姉妹都市関係について ──」，『北見大学論集』北海学園北見大学，1993 年。
・江東区教育委員会『平成 14 年度江東区立中学校生徒海外短期留学報告書（第 16 回)』，2002 年 11 月。
・鹿追町『第 2 回鹿追町北方圏視察研修報告書』，1984 年。
・鹿追町『第 3 回鹿追町北方圏視察研修報告書』，1986 年。
・北海道カナダ協会『第 15 回北海道・カナダ姉妹都市会議録』，2006 年。
・北海道カナダ協会『第 16 回北海道・カナダ姉妹都市会議録』，2007 年。

インターネットによる資料とサイト

・板橋区役所「世帯数・人口数平成 21 年 7 月 1 日」
http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/020/020305.html
・「カナダ首相　伊達市で歓迎」，2009 年 7 月 7 日，*Yomiuri Online*（『読売新聞』）
hokkaido.yomiuri.co.jp-080707_7.htm
・「カナダ首相直筆の銘板届く　サミットで伊達を訪問」，2008 年 12 月 3 日，*Doshin Web*（『北海道新聞』)，
http://www.hokkaido-np.co.jp/cont/video-archive/?k＝2008120301.html
・カナダ大使館ホームページ
「カナダ・日本　姉妹・友好都市リスト」
http://www.international.gc.ca/missions/japan-japon/bilateral-relations-bilaterales/sistercity-jumelage-jpn.asp
・北見市「平成 20 年度国際交流事業及び姉妹友好都市交流事業実施報告について」
www.city.kitami.lg.jp-20sirixyou2.pdf
・北見市「平成 20 年度姉妹都市交流事業（予定）について」
www.city.kitami.lg.jp-19sirixyou2.pdf
・「江東区の世帯と人口（住民基本台帳による）区民部区民課」(平成 21 年 1 月 1 日現在)
http://www.city.koto.lg.jp/profile/koto/5353/15817/file/H21.1.pdf
・サヴァン・スズキについて
http://www.youtube.com/watch?v＝C2g473JWAEg
・世田谷区役所「せたがや統計情報館」(平成 21 年 7 月 1 日)
http://www.city.setagaya.tokyo.jp/toukei/index.html
・「伊達市・壮瞥町・大滝村合併協議会」第 10 回協議会資料
www.city.date.hokkaido.jp-merger_item.html
・「伊達市・壮瞥町・大滝村合併協議会，平成 16 年 7 月 1 日」
http://www.city.date.hokkaido.jp/gappei/nishiiburi/pdf/m010_g001.pdf
・自治体国際化協会のホームページ

「姉妹提携情報」
http://www.clair.or.jp/cgi-bin/simai/j/02.cgi
・つくば市「国際交流」，『つくば市』のサイト
www.city.tsukuba.ibaraki.jp-000327.html
・常呂町「『カーリング』── 小さな町の大きな挑戦常呂町」
http://www.nrc.or.jp/kakehasi/110-112.pdf
・法務省入国管理局「平成 19 年末現在における外国人登録者統計について」，平成 20 年 6 月。
www.moj.go.jp-080601-1.pdf
・「横浜市区別外国人登録人口（平成 21 年 6 月末現在）」，横浜市統計ポータルサイト．
http://www.city.yokohama.jp/me/stat/jinko/non-jp/new-j.html
・北海道カナダ協会のホームページ
http://www.lilac.co.jp/maple/sister.htm
・ The City of Toronto のホームページ
http://www.toronto.ca/invest-in-toronto/pop_dwell.htm
・The Terry Fox Foundation のホームページ
http://www.terryfoxrun.org/english/about%20terry%20fox/facts/default.asp?s＝1